
DEVILS NAME

Cupid

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DEVILS NAME

【Nコード】

N1081X

【作者名】

Cupid

【あらすじ】

“俺は、彼女を助けるって誓った……だからまだ、帰らない”

ごく普通の少年“桐島 祐人”の日常は、とある日から一変する……魔法で争い続ける異世界で、彼は大切な“何か”を見つけていく。その代償に、“何か”を失いながら……

プロローグ

昔の話だ……あの時の俺にとっては気のせいだったように見えただ。

あの日……俺には月が二つに見えた。一つは青白く光っていた。もう片方は、不気味なくらいに黄色く光っていた。

俺はその日、目が疲れてるんだと思って早めに寝たけど……その二つの満月が、これから俺に起こる出来事を教えてくれていたんだと、俺は今になって思う。

……俺がそれに気付くのは……もっと……ずっと……未来のことだ

……
その日が……俺に起こる異変の“ハジマリ”だったんだ。

1話 奇怪ナ夢

太陽も沈み、段々と辺りも暗くなっていく頃。ようやく部活から解放された俺は急いで校門を出た。

俺の名前は“桐島 桁人”。ごく普通の高校一年生だ。

高校に入学して何ヶ月か過ぎ、この環境にも慣れてきた。友達もでき、部活にも入って充実で平凡な毎日を過ごしている。

太陽も沈み、空の星が少しずつ見えはじめてきた。そして月も昇ってきた。

「……………」

今夜は満月のようなのだ。だけど、

「……………」

目の錯覚なのか疲れてるのかわからないが、月が二つに見えた。

「……………」早く帰ろ」

俺は少しでも早く帰るため足を早めた。

「……………」ただいま」

「あ、おかえり桁人」

返事を返したのは、俺の姉だ。両親が昔事故で亡くなったから、今は姉と二人で暮らしている。

「食事にする？それともお風呂？」

「……………」寝る」

俺は冷めた感じで言った。俺は少々ドライな性格なのだ。

「……………」そういえばさ」

「何？」

「今日、月二つに見えた？」

「可笑しいこと言うな。一つに決まってんでしょ」

「……………」ふうん」

そうか……やっぱり疲れてるんだ……俺。

「……んじゃ、おやすみ」

そして俺は部屋に戻った。

ボタン……

扉を閉めた後、服を着替えて、そのままベッドに倒れ込むように寝た。

その夜、俺は奇妙な夢を見た。

「……………」

目を開けると、周りは闇に包まれていた。

そして、目の前には小さな女の子がいて、よくわからない“何か”に捕まっているように見えた。

「……君は誰？」

「……………」

彼女は何も言わない。いや、小さい声で何かをしきりに呟いている。耳を澄まして聞く。

「……私を……たすけて」

俺にはそう聞こえた。

「……………！？」

そして、この夢は終わった。

夢から覚めた後、少しの間、頭の中が混乱した。意味わからないし、だいたいちどうすればいいか解らなかったから。

でも、そんなことより大切な事を思い出してきた。今日も学校だ。

いつもの事だが姉は、俺が起きる前に仕事に出かける。（教師みたいな仕事だと言ってたが、詳しくはわからない）

俺はパンにジャムをつけて口に運ぶ。

（……余裕あるし、もうちょっとゆっくりするか）
ゆっくり食事をした後、準備をして家を出かけた。

「おゝい、衿人！」

遠くから俺を呼ぶ声がある。

「……………なんだお前か」

「なんだとはなんだよ!？」

こいつは“仲岡 圭一”

俺の友達一号だ。

「今日も天気がいいな！」

「……………朝からうるせえ」

こいつは熱血漢だし、何より人に気軽に接することができる。その性格だから俺ともすぐに仲良くなったのだ。

「お!後ろから誰か来たぜ？」

圭一が言った。後ろを振り向くと、こいつは必死に走っている。

「どうせあいつだろ？」

「まあ、ほばあいつに間違いないな」

それから何分後かにこいつは俺らに追いついた。

「はあ…はあ…お、おはよゝ、衿人君、圭一君。」

息を切らせながら俺らに挨拶をするこいつは“篠坂 陽子”。俺の友達二号だ。

スタイル抜群で美人(って誰か言ってた)だから、クラスの男子からはとてつもなく人気である(俺は知らないけど)

「おつす陽！」

圭一は彼女の事を“陽”って呼ぶ。

「お前、また寝坊かよ」

俺は少し茶化す。

「寝坊じゃないもん!てか私、毎日寝坊してないよ！」

まあ、こいつが寝坊したとは思ってないけども…

「まあ、言われてみればそうだよなあ。陽は俺より早く来てるからな」

「お前が遅いだけだろ」

「ってか寝坊するのは、大体が圭一だ。」

「なにを〜！言ってくれんじゃないか！」

「……早く行くぞ？時間がない」

携帯の時計を見ると、もう8時だった。ホームルームは8時20分からだ。

「うげっ！こんな時間かよ！？」

「二人とも急ぐよ？」

陽子はそいつって走り出す。俺らも陽子に着いていく。

何も変わらない平和な毎日。普通の日常。本当に楽しい時間だった。

あの時まで………

2話 終ワリノ始まり

昼休み。1〜4時間目の授業も終わり、俺達三人は屋上へと向かった。理由はもちろん昼食をとるためだ。

「やつぱし屋上はいいな」

話は大体、圭一のどうでもいい話から始まる。

「どうしてなの？圭一君」

陽子は真面目に質問をする。俺は聞いてるだけ…

「だってさ、このきれいな青空を見ながら飯が食えるんだぜ？」

「空なら教室でも見えるけど？」

少しだけ俺も口を挟んだりする。

「教室でみる空とは違うんだよ！桁人はわかってねーなあ」

「……ハイハイ」

そんなん知るかよ！って言いたかったが、とりあえず思い止まった。

「俺昨日、変な夢見たんだ」

いきなり圭一が言い出した。

「なんか青く光ってる奴がいてさ、小さい声で何かを呟いているんだ」

「変な夢だね」

「しかも周りは知らない場所なんだよね。炎に包まれてたし」

「……」

俺は少し驚いた。出てくる奴や風景は違えど、内容は俺の夢と同じだった。

「どうした？桁人」

「……………いや」

なんでもない…そう言おうとした時、
ピン

何かが割れた様な音がした。

「……………！」

圭一にも聞こえたようだ。

「陽は先に教室帰つていて。俺らちよつと用事思い出した」

「うん、わかった」

そういつて陽子は教室に戻って行った。

「何だつたんだ？あの音」

「知らないよ」

圭一は少し考えこんだ。

そして、

「俺らも教室帰つか」

「……そうだな」

俺はそう言った。けど、

「……………！？」

「どうした？」

「……この教室……………」

俺が指差したのは、化学教室。

「なんだか変な感じがする」

「そうか？」

「ちよつとだけ変だつていうか……………」

「じゃあ中に入ってみるか？」

圭一の提案に俺は頷く。

ガラガラッ

圭一は勢いよく扉を開ける。

「……………」

特に変わった様子はなかった。

「気のせいじゃね？」

そうかもしれない……俺もそう思いはじめた。俺が気にし過ぎたのかもしれない。

「まあ、何もなかったつーことで、さっさと帰ろうぜ」

「……………ああ」

俺らは化学教室を出ようとした。圭一が扉に手を伸ばした。

その時、

「……………！？」

「……………！！」

いきなり教室の空気が変わった。とてつもなく気味の悪い雰囲気、教室中を包み込む。

圭一も、この空気の変化には気付いたようだ。

後ろを振り向くと、一カ所に黒い影が集まっている。影はどんどん大きくなり、少しずつ形を変えて怪物みたいになっていく。

「おい！…なんだよあれ！？」

圭一が尋ねてくる。

「……………知るかよ」

影はどんどん俺らに近づいて来る。

「これ……………夢だよな？」

「……………とりあえず逃げるぞ」

「お…おう！！」

そして俺達は教室を出ようとした。

「……………なんで！？」

「どうした？圭一」

「扉が開かない！！」

「……………」

後ろからは、影が近づいて来る気配がする。

影は俺達の方へ手（の様なモノ）を伸ばす。俺達の周りには少しずつだが、影が集まっている。

「……………チッ」

絶体絶命か……………そう思った時、頭に声が響く。

『……………見つけた』

最初は意味が分からなかった。そのことを考えてる間にも、影は俺

らを包み込み続けている。

そして、俺はある一つの仮定にたどり着く。

「……………チッ」

俺はとっさに圭一を突き飛ばした。

「痛っ！何しやがんだ！」

「こうするしかないんだ！」

影は俺の周りに円を造る。そして、その円の中には、星型の光が現れていく。

多分これは、魔法陣だ。

何となくだが、俺はそう思った。

魔法なんかありえないとは思うが、この状況からして、信じるしか他なかった。

魔法陣が光に包まれた時、

「祈人！！」

俺は、暗闇の中に、落ちていった。

圭一の声は、少しずつ、小さくなっていった。

3話 異世界ト戦争

俺はまた夢を見た。

あの時の夢と同じ状況だった。周りはやっぱり暗くて、目の前には少女が捕まっている。

「……君は誰？」

俺は彼女に問い掛ける。

返事はない。

「なんで捕まってるんだよ？」

「……」

これも無視。

「二度目だ……君は誰だ？……というか君は何だ？」

「……」

これも無視か……と思っていたら、

「……私は」

彼女は口を開いた。初めて、俺の問いに答えた。

けど、

「私は……魔女よ」

幼い彼女の声色はとても大人びていて、まるでこの先の人生を諦めたかの様な暗く沈んだ声だった。

「……はあ？」

俺は彼女の問いに、そう応えるしかなかった。

「魔女って、あの魔女か？」

「……その通りよ」

……意味分かん。あの時の黒い影といい、この少女の言ってる事といい、分かん事が多すぎる。

「……貴方はまだわからないわ」

……と彼女が呟く瞬間、周りが明るくなる。

そして、夢が終わった。

「……………」

目を覚ましたらそこは、見知らぬ場所のベッドの上だった。

「……………ここはどこだ？」

体を動かそうとした。

「痛っ！！」

突然体に痛みが走る。よく見ると、体中に包帯が巻かれている。

「……………」

「あ！気づかれたんですね？」

扉の方角から声がした。振り向くと、白衣を着た女性が、薬や新しい包帯を持って来ていた。

「大丈夫ですか？」

「……………多分」

俺は曖昧に答えた。曖昧にしか答えなかった。

俺は彼女に問い掛ける。

「ここはどこです？」

「ここは、ハウテック・レイディア魔法学園です」

……………え？魔法学園？なんだそれ？

俺は改めて窓の外を見る。

「……………」

実際俺は驚嘆している。

まあ、俺の町とは違う場所に來たってことは分かった。

町並みも、日本とは違うし…………

だけど流石に魔法学園は予想してない。

まさか異世界とはね…………

「どうかしましたか？」

俺はこの部屋から出ようとしていた。

「あ、まだ動いたら……」

「ちよつと、外に出たいので……その……肩かしてくれませんか？」

「……………いえ、構いませんよ」

やはりここは異世界らしく、空を飛んでいる生き物が違つし、周りに車や、ましてや高速道路なんかは全くなかった。

「ここはどんな学校なんすか？」

俺は彼女に尋ねてみる。

「この学園では、基本的魔法から上級魔法までを教えているのです」

「へえ……」

それくらい何となく分かる。

「そして、魔法の素質の優れる者達を、戦争へと駆り出しているのです」

「……………戦争？」

まさかのワードが出てきた。

「はい、我が国では、西のハインツティ国と、今まさに戦争中なのです」

そう、この国では、日本では起こらない、戦争が起きているのだ。

俺の横を、何名かの生徒が通り過ぎる。

彼ら、あるいは彼女らは、兵士になるかもしれないのだ。

「……………俺と同じ年くらいなのに……………」

「そういえば、あなたはどこの生徒なのですか？」

「えっと……………どうして？」

「だってこの制服、この学園の物ではないもの」

なんと答えればいいのだろう。

多分異世界とか言っても、彼女は信じてくれないだろうし。

「えっと……田舎の方の学校でして……」

「そうなんですか……」

とりあえず、嘘でごまかした。

「じゃあいつその事、この学園に転入しませんか？」

「転入？」

「そう、学園長には、私から言います。多分OKは貰えると思うので、怪我が治ったら転入って事で」

「ちよっ……あの！」

俺の言葉は彼女に届かず、彼女は走り出した。

そして二週間後、

怪我が治った俺は、

「桐島……祈人です」

本当に転入できてしまった。

自己紹介の後、俺は指定された席に座った。

「新しい制服だし……」

マジで転入できたよ。

「………ねえ」

隣から声をかけられた。女子生徒だった。

「………何？」

「あんたの魔法って何？」

魔法？……魔法って言われても……

「まだわかんないんだけど」

「………まだ魔法使えないの？」

……流石田舎者ね」

彼女は鼻で俺を笑った。

「……………チツ」

彼女に気付かれないように、小さく舌打ちをした。

「次は、実戦の授業です。

……………キリシマユキト君」

「……………？」

フルネームで呼ぶなって……………

「……………君はまず、武器を選びなさい」

「……………はあ」

武器と言っても、模擬戦用だし、しかも、

「剣か杖しかない……………」

こん中から選べって言われても……………

「魔法使えないから、剣しかないし……………」

って事で、俺は剣を選んだ。

「あの……………選んだんすけと」

「ああ、それじゃあ……………彼女と手合わせしてくれ」

「……………あ！」

「……………チツ」

俺は舌打ちをした。

先生の後ろにいたのは、俺の隣にいたやつだ。

「あんた、魔法使えないのに戦えんの？」

彼女は少しナメた口をきいてきた。

「五月蠅いな……………」

俺は素早く走り出し、剣先を彼女の喉元に向ける。

「……………なっ!？」

「……………実戦だったら、死んでんじゃない？」

こっ眼看着俺は、剣道部員だったから、この大きさの剣の扱いは長けている。

「現役剣道部員ナメんなよ」

俺は彼女に聞こえないくらい小さい声で呟いた。

彼女の顔を見て、俺は心の中で笑った。

彼女の顔は、驚嘆と屈辱の色がくつきりと出ていた。

4話 契約ト双銃

「あいつ、超ム力つく!!」

そう言っているのは、俺の隣席のあいつ。

名前はたしか……アリアだった気がする。

そのアリアが言っている“あいつ”とは、もちろん俺の事だ。

前回の模擬戦で、俺に敗北してから、あいつは俺を目の敵にしている。別気にしないけど……

「あゝ!! あんな田舎者に私が負けるなんて!!」

何日も前の事なのに、まだ根に持ってるのかよ。

彼女は、俺の姿を見つけると、すぐさま睨んできた。

次の授業は模擬戦で、相手は……

「やっとあんたとやれるわ」

アリアだった。

「まだ根に持ってるのかよ」

「五月蠅いっ!! 前回の私とは違うのよ!!」

そう言ってる彼女は、いきなり炎を出して来た。

「……」

俺はそれを軽くかわす。

「……!!」

「フッフ、かったわね」

足元には魔法陣が描かれていた。

その魔法陣からは小さい氷が発生し、俺の足を止める。

「……チツ」

「これであんたは動けないわ……私の勝ちね」

「……」

彼女が俺にとどめをさそうとした時、

「大変だみんな！

……敵が攻めてきたぞ！！」

「皆さん、戦闘の準備をしてください。

もし危ないと思ったらこれを使ってください」

先生は俺達に紙切れを渡した。

先生から渡された紙には魔法陣が描かれていた。

「それでは………戦闘開始です！！」

その一言と同時に、俺以外の全員が散らばった。

俺も遅れて戦場に着いた。

目の前には、重装備の兵士が、学園の生徒や先生と争ってる。

何歩か近づいていると、足元には何名かの死体があった。

「……………」

幸いにも、俺は同級生の死体を見なかった。

これが戦争。本当に戦争をしてるんだ。

「キシマユキト！後ろ！！」

誰かが言った。振り向くと見知らぬ兵士が、剣を振りかぶっている。

「……………！！」

逃げれない。兵士の剣は振り下ろされた。

俺は目を閉じた。

「……………！！」

次に目を開けると、夢で見た空間にいた。

目の前にはあの少女もいる。

「……………なんか用か？」

「せっかく助けてあげようと思ったのに、そんな口きくのね？」

「助ける？」

「あのままなら、貴方は確実に……死ぬ」

「……」

「だけど、私の魔法を少し貸してあげる。それで助かるはずよ」

「お前、魔法持ってたのか？」

「言っただでしょ？……私は魔女だって

……そのかわり条件があるの」

「……なんだよ、その条件って？」

「……」

彼女は少し間を開けて、そして覚悟を決めたような顔で、

「私を……探して。」

……こんな夢の中なんかじゃなくて
……といった。

「………わかった、見つけだすよ」

「………貴方は自分の命のためならなんでもするのね」

「違う」

「じゃあ何故決断が早かったの？」

彼女の質問に俺は、彼女と同じような覚悟を決めて言った。

「確かに死にたくない。でも、それだけじゃない。

……君みたいな幼い子が、必要のない覚悟をしてるんだ。俺も、それに報いなきゃならないだろ？」

「別に報いなくてもいいけど……」

「それでも俺は、君を見つける！絶対だ。

絶対に……君を助ける」

「………ありがとう」

そう言った後、彼女は一度目を閉じる。そして目を開けると、彼女の目の色が紅く変わっていた。

「………契約よ。こっちに来なさい」

「………ああ」

俺は少しずつ、彼女のもとへと歩く。

彼女の近くにたどり着くと、

「……し、しゃがみなさい」
と彼女が言った。

「……ああ」

俺は、彼女の言った通りにした。

「……」

彼女の顔がだんだんと近づいてくる。

「……ちよっ!？」

そして、彼女の唇が、俺の唇と重なった。

「……てめえ!!」

「……これで、契約成立よ」

だんだんと周りが明るくなる。

「最後に……貴方の描いた“武器”を想いなさい」

「俺の……武器？」

そこで夢は終わった。

気付くと目の前に兵士がいて、剣を振りかぶっていた。

俺は咄嗟に手をかざす。

すると掌から黒い影みたいな物が出てきた。

影は兵士の剣にとりついて、動きを封じている。

その隙に攻撃射程から逃げる。

「何?……その魔法」

アリアがこちらに近づき言った。

「……まあ見てな」

俺は両手を前にかざす。影達が両手を包む。影が消えた頃には、両手には新しい武器を持っていた。

「おお……マジで出てきた!」

銃と剣が一緒になった“双銃”。

この双銃は、俺と圭一が初めて一緒にやったオンラインゲームの武

器をイメージした物だ。

「あ！危ない！！」

アリアが叫ぶ。後ろから兵士が三人来た。

「……落ち着けて」

俺は兵士達に銃口を向け、トリガーを引く。

…一人

……二人

………三人

兵士達はバタバタと倒れた。

アリアがこっちに走って来る。

「あんたバカじゃないの！！一人で兵士倒すとか……」

「だから落ち着けて」

「………！あんた、その目……」

「目？」

「紅くなってる」

彼女の魔力を貰ったからだろうか、俺の両目は、彼女と同じ紅色になってるらしい。

「ああこれ……契約の証だからな」

「何それ？」

「お前には関係ないことだ」

突然空に花火（っぽい何か）が上がった。

「何だあれ？」

「撤退命令よ」

………戦闘は終わったのよ」

「………」

こうして俺の初戦闘は終わった。

この戦争での死者はほぼ相手の兵士だったが、こっちの勢力も……

…中には何名かの生徒も死んでいた。

「………」

戦争なんて、後味の悪いものだ………

この世界の人達にそう叫びたかった。

それでも、魔法戦争は続く。

5話 異世界ノ王女

あの戦闘から数日後、俺はこの学園で、軽く有名になった。理由は、俺の武器である“双銃”。

この世界では、銃自体がない。だから、銃が一つあるだけでも珍しいのだ。

学園内の研究者は、この双銃の性能を知りたがっている。

「ねえ君、君の武器、ちょっと見せてもらえるかな？」

こんなふうに尋ねてくるやつもいなくはない。

「……なんで？」

「いや、ちよつと研究を……」

「他のやつに頼めば？」

まあ俺はこんな感じに追い返しているが……

尋ねてきたやつは、諦めてどこかに行った。

「……めんど」

「お疲れのようね」

向こう側からアリアが歩いてきた。

「………なんか用か？」

「先生が呼んでる。私について来て」

「めんどくさいなあ」

「いいから！早く」

俺はアリアに着いて行き、校長室（らしき場所）にきた。

「失礼します」

「おおアリア、よくきてくれた。君も……」

「………はあ」

学園長………っていつから、老人をイメージしたけど、そこまで老いてはない。

「俺になんか用ですか？」

「ああ、この前の戦争を覚えているかい？」

「……はい」

言われなくても、あんな後味の悪いもんは、忘れたくても忘れられない。

「……普通、生徒が兵士を倒すことはできないんだ」

「……はあ？」

「兵士は皆大人だ、魔力が子供より強い。生徒はまだそこまで魔力はない。できて足止め程度だ。だが君は、その兵士達を、一人で、しかも三人倒したらしいじゃないか」

「あれは魔法じゃなくて、武器の性能ですよ」

「だけどその武器を造ったのは、君の魔法だ」

「……俺の魔法じゃないし」

俺は小さく呟いた。

「そして、その君の魔法の属性も、この国じゃ珍しいんだ」

「影が……ですか？」

「惜しいね。君の魔法は、

……闇だよ」

「闇……ですか」

「そう、闇や光といった魔法は珍しい。この世界中にも百人いるかどうかの属性だ。そのほとんどが魔女か王族になっている」

そこで学園長は、一拍開けた。そして繋げた。

「もしくはそれらと契約をした者……か」

俺は学園長を睨む。睨みながら言い放つ。

「……何が言いたいんですか？」

ピリッとした雰囲気が漂う。

その雰囲気吹き飛ばしたのは、学園長の言葉だった。

「いや、話がズレて済まない」

「……？」

「今回の戦争になったこの学園に、ある人物が来るんだ。だから君

達二人にその護衛をと思つて呼んだんだ。また敵が来るかも知れないからね」

「あの……どうして私達二人だけなんですか？」

「ああそれはね、アリア君は成績優秀だし、防衛魔法も取得している。そして桁人君は、双銃での遠距離射撃がある」

「……………」

「それで、護衛をする相手は誰でしょうか？」

「うん、そうだね。王女様だよ」

「……………え？王女様？」

「……………へえゝ王女様か」

「へえゝ……………じゃないわよ！王女よ！？王女！！」

「守ればいいんだろ？簡単じゃん」

「そう簡単なもんじゃないし、この国の次期女王候補よ？」

「だから、お前がその王女に防衛魔法つてやつを付けとけばいいじゃん」

「そうだけど……………魔法陣造んの大変なのよ！？」

「……………五月蠅いなゝ」

俺は双銃を取り出す。

アリアは少し間を開けた。

そして緊張したような顔で一言言った。

「不安じゃ……………ないの？」

「……………」

俺も少し間を開けて言った。

「不安じゃねーよ。お前成績優秀なんだろう？だったら防御はお前に任せれる。」

……………最悪俺が、体を張って守るからさ」俺はアリアの頭をポンツと叩いた。

「そう考えたら楽じゃね？一人で気負いすぎなんだよ」

「……………フフ、そうね。あんたもたまにはいいこと言うじゃん」

アリアは小さく笑ってる。気のせいかなアリアの顔が赤かったような

……

そして王女様が来る前日。

「……………」

俺は双銃が正常に使えるかを試す。

目の前にある木に銃口を向ける。

一度呼吸をして止める。そしてトリガーを引く。

タダンッ タダンッ

「……………」

とりあえず正常だ。遠距離の射撃もできる。

「……………」

そして当日。

「……………」

「ガチガチじゃねーか」

「仕方ないじゃない、王女を守るのよ。緊張するに決まってるわ」

「……………」

「……………」

校門からいかにも貴族が乗るような馬車がやって来た。

「ほら、アリア、魔法」

「乗り物には無理よ。」

「……………」

「……………」

「ええ！？私??」

「おう、俺めんどいし、ここで見張らなきゃいけないし、それに、女同士の方がいいんじゃない?」

「う、うん。わかったわ」

アリアは馬車の方に向かって走って行った。

「……………」

俺は周りを見回す。

「……………」

まだ見えないけど、何名かの気配がする。

「マジで来てるよ……………」

一カ所が光った。多分魔法を使おうとしているのだろう。

「……………」

俺は双銃の銃口を、光の場所に向ける。少し闇の魔法を弾に纏わせ
る。

呼吸を止める。

トリガーに手を置く。

そして、トリガーを引く。

一発 二発 三発

銃口から出た弾は、黒い光を纏わせ、魔法陣の元へと向かう。

光がおさまる。多分命中。

今度は別の場所から光る。

その光の場所から、炎の弾がこちらに向かってくる。

双銃を炎に向け、トリガーを引く。

炎の弾を消した。

そのまま連射。

光が消える。命中。

「……………あと一つ」

最後のエリアを見ると、一人別の場所に行こうとしている。

「させるかよ！」

空弾を入れ替える。俺のイメージ通りの武器だから、弾の入れ替え
は楽だ。

「……………チッ」

しかし、その間に逃げられた。

多分、王女の所に行ったのだろう。

俺も王女の元に向かう。

「はぁ……はぁ……お、王女様!!」
「……………」
「はぁ……はぁ……あの、これ持っていて下さい」
「この紙切れは？」
「お守りだと思って下さい」

俺は王女を探して走り回る。
「……どこにいったよ？」
ようやく見つけた。アリアも一緒だ。
「アリアッ!!」

「……桁人？どうしたの？」
「……この辺りに……敵がいる」
「えっ？」
「……そっちも気にしてくれ」
「わ、わかった」

「……………」
もう一度周りを見回す。どこかはわからないが、魔法陣の気配がある。

俺は王女の方角を見る。
後ろから炎の弾が王女に迫っている。

「……………チッ！」
王女とかぶってるから、双銃を使えない。
「あんた、危ない!!」

王女は俺の声で後ろの魔法に気づいたが、間に合わない。
「……………クソッ!!」

俺は走り出す。
向かうは王女の元。

俺は自ら炎に飛び込む。

「……………！！？」

「……………桁人！！」

ああ…………意識が朦朧とする中、力を振り絞り、双銃をある方向に向け放つ。

黒い弾道は、敵がいた場所へと向かい、光る。命中したようだ。

「……………大丈夫ツスカ？」

「え……………ええ」

「そりゃあ……………よかった」

俺は心配をかけないように微笑む。

「……………貴方は」

「……………？」

王女は何かを言いたそうだったが、俺の意識がもたなかった。

目の前が黒くなっていき、最後には意識がとんだ。

6話 エゴイスト

目を覚ますまで、俺は夢を見ていた。

小さい頃の思い出。まだ6才だった頃の記憶。

夏休みの間、公園に執事を連れた、いかにも金持ちっぽい感じの女の子がいて、よく遊んだ。でも、すぐにいなくなったけど……

「……………」

俺は目を覚ました。

周りを見ると、ここは保健室のようだった。

多分誰かが運んでくれたんだろう。

「……………」 やつと目を覚ました」

側にはアリアがいた。

「……………」 あんたバカなの？ 私が防衛魔法の紙を王女様に渡したのに、何一人カッコつけてんのよ！！」

「……………」 ゴメン、あん時は敵探すのに必死で忘れてた」

「……………」 本日にバカなんだから。

「……………」 心配かけてんじゃないわよ」

「……………」 ？」

最後に何か言ったようだが、聞き取れなかった。

「長い間起きなかったから、死んだんじゃないかって思ったわよ」

「……………」 俺って、いつまで寝てた？」

「多分今日で二週間つてところ」

二週間…………… そんな長い間意識が戻らなかったのか。どんだけダメーシ喰らったのか。

「でもまあ、王女様も無事だし、良しとしましょう。」

…………… あと、あんたの怪我が治ったら、王宮で感謝状が贈られるから、

忘れないように」

「あ、ああ……」

アリアはそれだけ言って帰って行った。

改めて体を見る。体中には包帯がグルグル巻かれていて、頭にも包帯が巻かれていた。

頬にはガーゼ（みたいな物）が貼られていたし、どんだけ怪我してんだってツツコミたくなるぐらいの包帯の量だ。ほとんど肌が見えない。

「……………包帯多い」

誰もいない部屋で、一人呟いた。

それから数日後。

俺ははれて退院できた。

「……………まだ包帯巻いてるじゃない!？」
いきなりアリアに言われた。

「大丈夫だって。激しい運動しなければいいって言ってたし。

それより行くんだろ?王宮」

「う、うん。じゃあついて来なさい」

アリアは歩き出す。俺は言われた通り彼女の後ろについて行った。

「……………これに乗って」

「これって……………馬車?」

俺の目の前には、あの時王女様に乗って来たやつと同じ感じの馬車が停まっていた。

「そうよ。王宮までは距離があるし、あんたがその怪我じゃあね」

「そうだな、そうさせてもらうよ」

そして俺達は、馬車に乗り込んだ。

「おお……椅子ふかふか」
乗り心地は……良かった。

「着いたわ……ここが王宮よ」
「……でかつ」

目の前には、俺の見てきた限りじゃあ一番でかい建物……お城があった。

流石王宮と呼ばれるだけはあるな、と感心する。

「桁人、ちゃんとして来てる？」
「ついて来てるし」

「ここ広いから、迷わないように……」

確かに広いけど、迷うほどここを歩く気はない。

「……着いたわ」

「……やつとか、長いなあ」

「文句言わない！

……入るわよ」

「……はいはい」

アリアは王女の間繋がる扉を押して開いた。

扉を開いた先には、俺らと同年ぐらいの女性が立っていた。

「……」

アリアはその人に頭を下げる。

「……？」

「ほら桁人、頭を下げなさい」

「あ、ああ……」

俺も言われた通り頭を下げる。

「別にかしこまらなくてもよいですよ」

「……はあ」

俺はまた言われた通り頭を上げる。

……って俺はこいつらの言いなりか……と、自分で自分にツツコンだ。

「フフフ、そちらの貴方も頭を上げて。今日は貴方達に感謝をするために呼んだのですから」

「は、はい」

「……こいつが王女か？」

「こいつとか言うな！

……でも正解」

こいつが王女かよ！？」

俺と同じ年齢で何？この地位の差。

「………」

「………」

王女は俺をじつと見てくる。

「………何？」

「あ！い、いえ、何でもありません。

……感謝の儀の準備をするので少しお待ち下さい」
そう言って彼女は部屋から出て行った。

「………」

アリアがこつちを睨んでくる。

「………何だよ？」

「何で王女様は、あんたを見つめていたのよ？」

……もしかして知り合い？」

「知らないし」

「じゃあ何で……？」

「だから知らないし。

……知り合いの誰かと俺が似てんじゃない？」

俺は適当なことを言ってごまかした。

実際、俺はこつちの世界の人なんか知らない。知っているはずがないんだ。

「準備ができましたので、こちらへどうぞ」

王女の使用人らしい人が、俺達を呼んでいる。

「それじゃ行くわよ桁人」

「……はいはい」

俺達は使用人の後をついて行く。

つれてこられた場所は、体育館みたいに広い。

……多分王女様の部屋だ。王様が座るような椅子あるし、それに彼女が座るし……

「わざわざ遠くから、よく来てくれました。それでは、感謝の儀をはじめさせてもらいます」

そう言つて彼女は椅子から立ち上がる。

そして、感謝の儀（うしきぎモ）が始まつた。

「……貴方に聖騎士（パラディン）の称号を差し上げます」

「パ……聖騎士！？桁人が？」

彼女は俺にペンダントを渡す。

「………何これ？」

「これは、聖騎士の証です」

「………彼女にはないのか？」

俺はアリアを指さしながら言つた。

「残念ですが、彼女には………」

「………」

俺はペンダントを投げ返す。

「………こんな物要らない」

「………！？」

「あんた！？何やつて………」

「俺には…… 必要ない」

「…………… そうですか」

王女は少し落ち込んでるような声を出す。

「…………… いいの？ 祈人」

アリアが尋ねてくる。

「何が？」

「聖騎士の称号。位の高い人しか貰えない称号を、貴方は棄てたのよ？」

「だから言っただろ？ 俺には必要ないって。」

…………… というより、称号なんてあっても俺には意味がないから……………」

意味わかんないって顔でアリアは見ている。仕方がないか。俺と彼女達の考え方は、少しだけ違うのだから……………」

「待ってください」

いきなり王女が俺達を呼び止める。

「祈人さん、少し時間頂けますか？」

「…………… 別に」

「それなら私について来て下さい。」

…………… 女性の方は先程の部屋で待たれるか、帰っていただいて結構です」

「…………… じゃあ先に帰れ」

「…………… 一人で帰れる？」

「大丈夫。私達が責任を持って連れて行きますから……………」

「ほら、王女様もそう言ってるし……………」

「…………… わかった」

そう言っアリアは部屋を出た。

そのあと俺は彼女について行き、ある部屋へとたどり着いた。

「…………… んで、何か用？」

王女は俺の質問に答えなかった。

代わりに何かを呟いている。俺には聞こえない。

少し経ってから彼女は、俺に聞こえるくらいの声で言った。

「……………お久しぶりですね」

「……………はあ？」

俺には意味が分からなかった。だって、知らない世界の、知らないはずの王女様が、いきなり“お久しぶり”なんて言うんだぜ？分かならずで頭痛いよ。

「……………人違いじゃない？」

俺は冷めた感じで言った。

「……………忘れたのですか？」

……………あの日の事を……………」

「……………あの日？」

あの日っていつだよ？

「……………まあ、無理ありません。ここは……………この世界は、貴方の世界とは違うのだもの……………」

「……………！！？」

何でその事をこいつが知ってたんだ？俺が別の世界の人間だって事を

……………

誰にも話していないはずなのに……………

その前に、こいつは何で俺の名前を知っていたんだ？

アリアとの話を聞いていたのか？

いや、違う。アリアとは誰にも聞こえない小さい声で話していたはずだ。

本当に、俺は、こいつを、知らないのか？

とても、夢に出てくる少女に、似ている気がする……………

俺が混乱している中、彼女は少しずつ俺に近づいて来た。

「あの日……………貴方の世界で言う“夏休み”に……………あの公園で私達は一緒に……………」

ああ……………何かもう分かってきたような分からないような……………
とりあえず俺に理解できた事は……………

夢に出てくる“執事をつれた少女”は、彼女……王女らしいということだ。

ただ、それでも疑問は消えない。

何で俺とは違う世界の人間が、俺のいた世界に来れたのか。

「……どうして私が貴方の世界に来れたか考えたでしょう？」

「何でわかるんだよ……」

「だって、そんな感じの顔をしていたから……それに」

「それに？」

「貴方なら、この話を聞いてすぐにそう考えると思いましたので」

彼女は一拍の間を空け、そしてまた口を動かす。

「お教えします。」

……時折、この世界と貴方の世界を繋ぐ“扉”が開くのです」

「……扉？」

「はい……扉というより魔法陣って言った方がわかりやすいと思います」

「……」

俺がこつちに連れて来られた時に見た魔法陣……あれが扉か……

「魔法の事は分かった。けど、何であんたが俺の世界に来たか教える」

「え！……えっ……と」

彼女は何か言いづらそうにしている。言うなら早く言っただけ。

「えっ……と、恥ずかしいのですが、気まぐれに異世界に行きたくなりました……」

「……え？」

気まぐれ？てめえ、今気まぐれって言ったか？

その魔法は、気まぐれで使えるモノなのかよ！

「……はあ」

俺は溜息をついた。それを見た彼女は、更に顔を赤らめながら言った。

「あの頃は……その……まだ幼かったから……」

「王女様!!?」

突然扉が開き、兵士らしき人が入って来た。その瞬間に彼女は落ちて着いた顔を見せ、冷静に返事をした。

「………何事です」

その真逆で、兵士は落ち着かない様子で話す。

「敵が……敵がこの王宮を攻めて来ました!!」

「………!!」

兵士から告げられた敵襲に彼女も言葉が出ないようだ。

俺は、動じていない様に見えて、少し驚いている。

まさか、こんなところで戦闘かよ……

「王宮にいる兵士達に伝えなさい……総員、戦闘配備!」

「はっ!!」

兵士は素早く部屋から立ち去った。

「………桁人さんは早く逃げてください。」

………本当は、こんな戦争なんかやりたくは無いの……」

彼女は哀しそうな顔で言った。

「………」

………また、面倒な事に巻き込まれたな……俺は。つづく俺って馬鹿だなって思う。

別の世界の人の事なんかほっとけばいいのに……

面倒な事が嫌なら、無視すればいいのに……

でも………誰かが哀しむ顔なんか見たくはない。見るだけで吐き気がする。

俺って………本当に………中途半端な人間だな………

「………」

「桁人さん!?!」

俺は何も言わず走り出す。

目指すのは……迫り来る敵陣だ。

「……………痛っ！」

怪我してる場所が時々痛む。それでも俺は走る。

「君は誰だ！？ここは戦場だぞー！」

分かっているさ、そんなこと。

「……………どいてくれ」

俺は小さく、でも力強く呟く。

「駄目だ！君みたいな一般人が……ましてや怪我人が来る場所じゃないー！」

「どけろって言ってるだろー！」

俺は大声で叫ぶ。相手を睨む。

俺がしつこいから諦めたのか、または馬鹿だと思い呆れたのか、または俺の紅眼に畏れたのか、兵士は俺を通してくれた。

俺は、誰かの為に、誰かを殺す。

そんなのは偽善でしか……自分のエゴでしかない事ぐらい分かっているさ……

それでも俺は……

「……………行くぜ」

俺は戦場へと駆け出す。

俺は偽善者……

俺はエゴイスト……

人を殺す事ぐらい、覚悟しているさ。

7話 覚悟

戦争に入ると、俺は直ぐに双銃を敵に向けた。

前回の戦闘や、王宮で見た味方兵士の鎧の色を覚えていたから、敵味方を分けるのは簡単だった。

しつかりと銃口を定め、トリガーを引く。

「ぐあああ!!」

「……………」

俺がトリガーを引く毎に叫び声が聞こえる。

銃弾が貫通した所から、赤い液体が……血が吹き出る。

そして、バタツと倒れて動かなくなる。

俺は直ぐさま次のエリアへと移動した。

俺は、俺が殺した人の死体を見ない。いや、見たくない。見たら、俺の覚悟が揺らいでしまいそうだったから……

次のエリアが一番激しかったと思う。

着いた時から足元には沢山の死体があった。

俺は直ぐさまこのエリアの戦闘に介入した。

「……………くっ！誰だ君は!？」

敵と剣で競り合っている味方兵士が俺に言った。

俺は間髪入れずに言い放つ。

銃口は、彼が競り合っている敵に向けたまま……

「あんたらの味方だよ」

幾つかの銃声が聞こえ、目の前の敵は、血を流しながら倒れた。

「あ、ありがとう……でも、君は直ぐにここから……」

「……………」

俺は、彼が最後まで言う前に動きだす。

「ぎゃああつ!!」

また一人、銃弾を喰らって死んだ。

もう何人殺しただろう……

顔や服に返り血を浴びている。シャツが真っ赤に染まるほどに……足元には数え切れないほどの死体がある。

「……………」

後ろから足音が聞こえる。振り向くとそこには剣を持った敵兵士が立っていた。

そして、俺に向かって勢いよく走り出した。

「あいつらの……仲間達の仇!!」

そう叫びながら、兵士は剣を振り下ろす。

俺はとっさに双銃で防ぐ。

全く、本当に双銃は便利だとつくづく思う。

遠距離から中距離は銃弾だけで何とかなり、至近距離は銃口の近くにある剣で攻撃や防御出来る。

だが、今回はヤバイ。怪我してる場所が痛み、力が入らない。

「……………くっ!」

あまり使う気はなかったが、魔法を使うしかないと思った。

「……………どける!!」

俺が叫ぶと同時に、黒い影が相手を吹き飛ばした。

倒れた相手に銃口を向ける。

銃声が響いた。

相手は動かなくなった。

「……………くっ」

左腕に痛みがはしる。怪我ではなく、何か別の原因で痛んだ。

その痛みは、何かに締め付けられる様な痛みだった。

倒れこんでいる俺の下に、相手兵士達がぞろぞろと集まってきた。

「大丈夫か！！？」

後ろからは味方兵士の声が聞こえる。

「いま助けに行くぞ！」

「来るなっ！！」

俺は叫ぶ。そして、魔法で彼等を包む。

「何をするんだ！！？」

「そこでじっとしてろ。危ないから……」

俺は双銃の弾一つ一つに魔法を纏わす。

そして、銃口を空に向ける。

トリガーに手をかける。

そして、引いた。

無造作に撃ちまくった。

空に幾つかの黒い線が舞う様に飛ぶ。

そして、相手を狙って落ちてきた。まるで流星群の様に……

相手は次々と倒れていく。

最後の一人が死んで、回りには味方ぐらいしかいなかった。

「……………」

傷が痛む。意識も朦朧としている。

意識を保てず、俺はその場に倒れた。

朦朧とするなか、兵士が俺を王宮に運ぶのが分かった。

誰かが何かを俺に呟いている。

少しずつ意識が遠のいていく。

そして、目の前が暗くなった。

「……久しぶりね」

誰かの声が聞こえる。目を開けるとそこは、夢の中だった。

「……」

目の前には変わらず少女がいた。

「一つ聞いていいか？」

「……何？」

「君が居る場所のヒントみたいなものを教えてくれ。場所がわかんないと探せない」

「……どうしてなの？」

「……？」

俺の質問とは違う答が返ってきた。

「どうしてまだ、私を捜そうとするの？あんな事の後なのに……」

「どうしてって……約束したし……」

「貴方は……恐くないの？」

「……何で？」

「だって、あんなに傷だらけで、一歩間違えれば死ぬのよ!？」

「……クスッ」

つい笑ってしまった。

「お前……結構、人の事考えてるじゃん」

「何言って……」

「俺は……死なない」

「……えっ？」

彼女は驚いた様子でこちらを見る。俺は、俺の想いを言う。

「……あいつらの所に帰るまで……死ねない」

そしてその続きを、俺は柄にもなく微笑みながら言う。

「だから……大丈夫。ちゃんと助けてやるから、心配すんな」

その言葉を聞いて、彼女は俯く。そして呟くように言う。

「貴方は……おかしいわ」

「何とでも……」

そんなこと、自分でも知っている。俺の考え方がこの世界じゃ浮いているって事ぐらい……

「……………王宮」

彼女はいきなり言っただけ俺は驚いた。

「私が捕まっているのは、多分王宮だと思う」

「……………何処の!？」

「……………もしかして!」

俺が思った王宮は、今俺が眠ってるであろう王宮の事だ。

「貴方が居る王宮ではないわ」

だが、彼女はそれを否定した。そのあと、彼女は少し考えていた。

「……………駄目!それ以上解らない」

「わかった。別の王宮に行くときは気にしてみるよ」

少しずつ周りが明るくなってきた。夢から覚める時間のようなだ。

「また……………会える?」

彼女は心配そうに尋ねる。

その様子は大人びた少女ではなく、その年相応の子供だった。

「大丈夫だよ。」

「……………寂しくて泣くなよ?」

俺は少し茶化す。

「泣かないわよ!」

大声で叫ぶ彼女が可笑しくて笑った。

そして、目が覚めた。

夢が……………一旦終わった。

8話 争イノ後ノ夜

目を開けると、そこは王女の部屋で、目の前には王女や学園の先生が何名かいた。帰ったはずのアリアも何故かいた。

「……やつと起きましたね」

王女が呟く。なんか泣きそうなんだけど？

「……泣くなつて。俺が気まずいからさ」

「……そうですね、すみません」

彼女は顔を上げて、ニコツと笑う。

「大丈夫だったかい？」

次に尋ねてきたのは、学園長だった。

「………ええ」

少しの沈黙がはしる。俺が先に口を開いた。

「すみません、迷惑かけたみたいで……」

「気にしてはいません。ただ、他に気になることがね……」

そう言つて学園長は、俺の左腕をじつと見る。

「………？」

「いえ、こちらの話です。気にしなくて結構です。それではお大事に」

それだけ言つて学園長は帰つて行つた。先生達も一緒に……だ。

そして今度はアリアが近寄つてきた。

「……あんたは本当にバカね」

「いきなり罵倒かよ。」

「………うるさい」

そう言つた彼女は今にも泣きそうな様子だった。

そして、最終的に泣き出してしまった。

「……死んだと思つたんだから……！」

「……悪かった。心配かけて」

「そうよ！心配かけてんじゃないわよ……！」

アリアは俺を睨むが、少ししたらまた泣き出した。
俺は、ベットに顔を伏せて泣く彼女の頭を撫でてやった。
また睨まれた。

幾らか時間が経ち、アリアも帰宅の準備を始める。

「結局、桁人はその怪我が完治するまでここに居るのね？」

「まあ……そうなるかな」

実は、俺の知らない間にそういう事になっていた。

“俺の怪我が完治するまで王宮に留まる”事を言い出したのは、なんと王女だった。彼女は自分のせいで俺がこうなったと思っているらしい。

「一つ忠告しておくわよ」

アリアは真顔でこちらを見つめる。

何だよこの緊迫感は？

「お……おお」

何かヤバい事でもあんのかよ？

「……王女様に手を出すんじゃないわよ？」

「………なんで？」

「王女様は次期女王になれるお方よ！ふざけたことしでかしたら、私が貴方を本気で殺すからね？」

俺は大きく溜息をついてしまう。

「なぜに溜息！！？」

「お前さ……俺の状態見てみ？」

俺はアリアに、今現在の体の状態を見せつけた。

「体中に包帯を巻かれているし、正直、動く痛い。無理だろ？」

アリアは小さく頷く。分かってくれたみたいだ。

その前に、俺が王女に手を出す事はまず無い。ありえない。

「本当に手を出さないでよ……念のために言うけど」

どんだけ警戒されてんの？……俺。

「大丈夫だつて……まだ死にたくないし……」

「……本当に？」

「お前は気にしすぎ」

「………わかった」

アリアはようやく諦めてくれた。そして部屋を出て行った。

「………ふう」

俺は一息つく。そして、窓の外に見える月を見つめる。

俺の世界で見える月より大きく、黄色く怪しく輝いている。

それは、あの日に見た月と似ていた……いや、同じだった。

俺は体を見る。前よりも多く包帯で巻かれている。

「………」

怪我しすぎだなんて自分でも思う。

溜息を一つはく。そして、左腕を天に向けて伸ばす。

次からは怪我をしないようにしよう。相手とは一定の距離を保つ事を意識しよう。

誰にも心配をかけないようにしよう………そう心に誓った。

「………寝よ」

俺はそう呟いて目を閉じる。ゆっくりと眠りにおちていった。

またあの日の夢を見た。幼い頃の俺が、同い年くらいの女の子と公園で遊んでる夢。

幼い俺は無邪気に（多分その女の子の）名前を呼ぶ。何度も、何度も……

“マリナちゃん”と……

不意に目が覚めた。

「……………」

窓から日差しが差し込む。眩しくてつい手で目を被う。

「……………」

何故だろう？俺の隣側の布団が膨らんでいる。何かが隣にいる。

俺はゆっくりと布団を剥がす。

そこには、何故か王女が眠ってた。しかも布団にがつつり潜り込んでやがる！

「……………チッ」

舌打ちをしつつも、俺は彼女を揺さ振って起こそうとする。全く起きない。

「てめえ、早く起きろって！」

そう呟きながら揺さ振る。

ようやく目を覚ました。

「……………！」

彼女は驚いた様子でこちらを見つめる。驚いたのはこっちの方なんだけど……………」

「あの……………その……………け、怪我が気になって……………それで……………」

王女は顔を赤くしながら言う。

「顔赤いぞ？熱あるんじゃない？」

そう尋ねると彼女は溜息を一つついた。

「衿人さんは鈍感です……………」

「……………何か言った？」

「別に、なんでもありません」

何か怒ってる？彼女は頬を膨らませ、そっぽを向いた。

「……………」

俺には彼女が怒ってる理由がわからなかった。

「怒っ……………てる？」

気になったので聞いてみた。

「怒ってません！」

彼女はそう言ったが、その表情は、やっぱり怒ってる……というより、拗ねているようだった。

「……………」

俺はベットから動き出そうとした。

「何してるんです？」

「いや、王女様がお疲れに見えたので、休ませてあげよう……」

「私より貴方の方が最優先ですよ」

「でも、またこんな状況になったら、あんたは嫌っしょ？それに俺は別の部屋でもいいし」

「で、でも……………」

めんどくさいことに、これだけ言っても彼女は遠慮を続ける。

参った様子で俺は頭を掻きむしる。

「………… お前はこのままでいいんだな？」

「………… ええ。貴方の怪我が治るまではこのままでいいですわ」

「………… じゃあ、お言葉に甘えて使わせて貰うぜ」

………… そういう訳で、俺は彼女の部屋のベットで療養することになった。

そしてまた、次の日の夜。

「……………」

「…………… すう……………」

「…………… なんでまたいるわけ？」

俺の横で寝息が聞こえる。

そつ…………… また彼女が横で眠っているのだ。

彼女は気持ち良さそうに眠っている。

「…………… うう……………」

多分…………… いや、絶対この状況は続くんだろうな。この時になんかそう思った。

……どうでもいいけれど……
最終的にそう思いながら目を閉じた。

怪我をして、俺が学んだ事は……

人はその状況に慣れると、気にならなくなるって事。
そして、その状況になる前の事を忘れてしまう事だ

たとえそれが、自分にとってとても大切で当たり前だった事でも……
だ。

9話 指切り

俺が王宮で世話になって二週間になる。

俺の傷は、ほぼ完治したと言ってもいい位に回復した。今では少しずつ双銃の点検をしたり、王宮の人達には内緒で、こっそりと魔法を試したりしている。（何故かこの人達は、俺が魔法を使うのを嫌がるんだ）

「……………」

それでも、朝になると、隣に王女様が寝ているのは、変わらなかった。

「……………」

最初の二、三日くらいは、

「またこいついるし！」

とか、

「何で隣に入るのさ!？」

とか呟いたが、一週間くらいするともう、それにも慣れてしまった。今日もまた隣で王女が寝ている。

俺は彼女を起こさないように、そっとベットから出た。

「明日くらいに学園に戻ろうと思うんだ」

そう俺が告げたのは朝食中。

俺がそう言つと、彼女は驚いた表情を見せた。

「そこまで驚く事ないだろ？怪我が治るまでだったし、いい頃合いじゃなか」

「そう……………ですね」

そう言う彼女の顔は、何故か少し残念そうだった。

「……………」

食後、俺は外の草むらに座って、ただボ～ツとしていた。空を見上げていたらなんだかうとうとしてきた。

そのまま草むらに寝転んだ。額に腕を乗せてゆっくりと瞳を閉じようとした時、

「何してるんですか？」

隣から声が聞こえた。王女様だ。

「見てわかんない？」

「ボ～ツとしてる」

「おいしい。うとうとしてる」

「同じ事ですよね。」

……………隣に座ってよろしい？」

「……………勝手にどうぞ」

そう俺が言っと、彼女は本当に隣に座った。

「風……………気持ちいいですね」

「……………そうだな」

「……………」

「……………」

彼女はいきなり無口になった。俺も話すことがないので黙っておく。

「今日で貴方というの最後なんですね」

「……………最後っていうのはちょっと違うけど、それに近いかな」

「……………少し寂しくなります」

「別に気にする必要はないだろう？」

「いいえ、少なくとも私は気になります」

「……………まあ、どうでもいいけど」

俺がそう言っと、彼女はクスクスと笑い出した。

「何で笑うわけ？」

「裕人さん、また言ってるんですもの。“どうでもいい”って
そう言った後、すぐに暗い顔になる。」

「もう……貴方とは会えないのかな……」

「だから、それは少し違うって言っただろ？」

「……え？」

「別に二度と会えないわけじゃない。そうだろ？ただ、あまり会えなくなるだけ」

「……」

それでも彼女は不安そうな顔をしている。

俺は一度溜息をつき、その後、右手の小指を立てて彼女に近づける。
「……？」

彼女はどうすればわからず戸惑っている。

「指切りだ。ガキっぽいけど。ちゃんと約束しよう。どこかでまた
会うつて約束。昔にもやっただろ？」

「……“マリナ”」

「……！？今、私の名前を……？」

「……覚えていてくれたんですね？」

「……それもおかしい。この前思い出したばかり」

「それでも……うれしい。やっぱり、ちゃんと名前を呼んで貰うの
はうれしいです。周りは皆“王女様”“王女様”ってばかり」

「ちゃんと名前を呼んで貰ってうれしいのはわかった。それで、指
切りをやるの？やらないの？」

彼女……マリナの出す答えはわかっていたが、意地悪な感じに尋ね
てみた。

「そんなの、当たり前じゃないですか」

そう言つてマリナは俺の小指に小指を絡ませた。

「……やっぱり子供っぽいですね」

「煩い。でも、これでいいんだ……はい、これで指切り終わり」

マリナは自分の小指を見ている。なんだか嬉しそうだ。

まるで、幼い頃にあの公園で出会った彼女を、また見ているかの様

な無邪気な笑顔だ。

「……あ、私、先に中に入ってます。もうすぐで隣国の使いの方が来られるので……」

「わかった。……別に俺に言わんでもよくないか？」

「とりあえず報告です！」

「……どうでもいいけど」

そう言ったので、彼女は笑いを堪えながら王宮へと歩いて行った。そこまでウケルもんなのか？俺の口癖って？

自問自答しても答えは見つからなかった。

結構時間が経って夜。

俺は王宮にある大きな露天風呂（？）に入っていた。

「ふう〜、良〜湯だなあ〜」

久しぶりに入った風呂はとても温かった。

「………何これ？」

俺は不意に、左腕に刻まれている黒い模様に気がついた。

模様というよりは、黒い線が腕を一周して描かれている感じだ。

「………まあいつか」

この時は、ただの線だと思っていた。だから、気にしない事にした。再び風呂を堪能していると、誰かがこっちに向かって来る音がする。案の定、誰かの人影が見えた。

「………おかしい。この時間は誰も来ないはずなのに……」

ガラスの扉が開き、人が中に入ってきた。

驚いた事に、その人影はマリナだった。

今回は、流石に俺も驚きを隠せなかった。

「な！なな！何で入って来るんだよ！？」

「だ、誰もいないと、お、思ったから……」

驚いているのはお互い様のようだ。

「とりあえず、俺から離れて入れよ？そして、近づくなよ？」

「わ、わかりました」

そう言ってマリナは俺から離れた位置まで歩き、そのあと湯に浸かった。

「……………」

「……………」

互いに話し掛けられないまま時間だけが過ぎていく。

「……………」

そろそろ風呂から出ようかと思った。

ちらっとマリナの方を見る。なんかグツタリしているようだった。

「どうかしたか？」

「………… フラフラします」

「………… は!？」

どという状態かを確かめるため、俺は恐る恐る彼女に近づく。よく見ると顔が赤い。

多分、のぼせたんだろう。

「歩けるか？」

「体に力が入りません」

「誰か呼ぶか？」

極力、俺が彼女を運ぶ展開だけは勘弁だ。

「出来れば桁人さん、私を外まで運んでくれませんか？」

俺は舌打ちをうつ。全く思い通りにいかないものだ。

断る理由が俺にはなく、仕方なく彼女を運ぶ事になった。

幸いにも、誰にも見られていなかった。

これを見られたら、多分、間違いなく、処刑だろう。

とりあえず熱気の少ない場所に彼女を運ぼうとする。

問題は運び方だ。

理由は簡単。彼女が女で、俺が男だからだ。

背負うにしても、彼女の胸が背中当たるのは気になるし、魔法を使って運ぶのは、なんか危険だし……

悩んだ挙げ句、

「そっぴゃ、こいつ王女だし」

って理由で、お姫様抱っこに決定した。

実行に移してみると、なかなかの恥ずかしさだった。

マリナでさえ、

「恥ずかしいです」

と、言う始末だ。

そんなこんなで無事にマリナを熱気の少ない場所に運んだ。

「体に力が入るようになったら、すぐに出るよ？」

それだけ彼女に言って、俺は先に風呂場から出た。

すぐさま服を着て、部屋に帰り、ベットに倒れ込むように寝転んだ。

俺ものぼせたんだろっか、体中が重い。

わからない。

ただ、疲れた。

そのままゆっくり目を閉じていった。

その時にマリナが部屋に入って来た。

そして、俺の隣に入って来た。

「なにしてんの？」

「お願い、今日が最後だから、一緒に寝させて」

「……………別にいいけど」

そんなこと、今はどうでもいい。

ただ眠い。

目を閉じる。

ゆっくりと眠りに落ちていく。

耳元でマリナが呟く。

「……………おやすみなさい、衞人さん」

それを最後に俺は眠った。

10話 死ナナイ覚悟

早朝になって、俺は王宮から出る馬車に乗る予定になっている。学園へと戻るためだ。

「ありがとな、長い間世話になった」

「いえ、こちらも楽しかったです」

「楽しかった？何で？」

「別になんでもないです。気にしないで」

彼女は小さく微笑む。

「……そんじゃまた」

そういつて俺は馬車に乗り込む。

「また……会えますよね？」

乗り込む前にマリナが言った。

俺は彼女の方を向く。そして、小指を立てて一言。

「指切り」

彼女も小指を立てる。

「そうですね」

「忘れんなよ？」

「はい、忘れません」

「俺は忘れるかも」

「また会えたら、私が思い出させます」

言うようになつたじゃないか、と俺は感心する。

「また……何処かで」

マリナが言う。

「生きてたらな」

俺も、それに答える。

馬車が動き出す。

マリナの姿が少しずつ小さくなる。

王宮も小さくなっていく。

森に入って、王宮は見えなくなった。

これから約2時間ぐらいで学園に着く。

俺は制服のポケットを探る。

ポケットの中には携帯と音楽プレイヤーが入っていた。

こっちの世界に連れて来られたときに、制服に入っていた物だ。

あれだけの戦闘の中でも持ち歩いていたのに、壊れていない。

イヤホンを耳につけ、音楽を流す。

ロック：J - P O P：バラード：

俺が気に入っていた曲、元の世界でいつも聴いていた曲だ。

久々の音楽を楽しみながら、外の景色を堪能する。

あっという間に学園に着いた。

「術人!？」

真っ先に声を上げたのは、案の定アリアだ。

「ただいま」

「やっと帰ってきた」

「やっと完治だ」

「……王女様に手を出してないわよね？」

「ないない」

「やっぱりこいつは警戒してたか。」

「そう……ならいいけど」

「そっぴや皆どうしたんだ?そんなに魔法の練習なんかしてさ」

「あんたは知らなかったわね。明日に魔技試験があるのよ」

「……魔技試験?」

聞き慣れない単語だ。

「“魔法技術検査試験”……略して魔技試験よ」

「ふう〜ん……で、どんなことをするわけ?」

「簡単よ、魔法の力を計るの」

「意外と簡単」

「簡単だけど、この試験でクラスが変わるのよ。」

魔力が高いほど上位のクラスに入れる」

「ふう〜ん、ようするに魔力が強ければいいんだな」

「あんた、そんなに自信あるの？」

「おう」

「あれだけ休んでたのに？」

「不思議とね」

「あ！そういえば制服が届いているわよ」

「制服？」

「これ」

アリアは自分の着ている制服を突く。

俺はすぐに納得した。

そういえばこの学園に入学したときに注文したつけ？

「その制服もボロボロだし、いい機会じゃない？」

「そうだな、着替えて来る」

そう言うときアリアはただ手を挙げた。

「これが新しい制服か……」

今着ている制服は学ランタイプだが、この新しい制服はブレザータイプだ。おまけに黒いカーディガンもついている。

とりあえず今着ている制服を脱ぎ、新しい制服を着てみる。

「……………お！」

前のやつより軽い。

それに不思議な事に、身体中を廻る魔力がこの制服にも流れている感じがする。

感想は、
最高だ。

俺は部屋を出た。ポケットには、音楽プレイヤーを入れて……

「似合ってんじゃない」

アリアが言った。お世辞だって事はわかっている。

「最高だ」

「何が？」

「着心地が。軽いし、身体中に魔力が流れてるって感じ」

「魔力が流れている？意味わかんない」

あれ？アリアには伝わらなかった。

アリアは感じていないのだろうか？

昼の授業は模擬戦だ。

しかも魔技試験を明日に迎えているので、皆緊張した面持ちをしている。

「…………ふう」

気楽な奴は俺ぐらいだろう。

もつと皆、リラックスすればいいのに、と俺は思う。

俺の対戦相手は、金髪碧眼の男子だ。

「悪いけど、君に負ける気がしないよ。僕はクラスで一、二位を争うくらいの成績だからね」

しかもナルシスト。

「それでは、始め!!」

先生の声が響く。戦闘開始の合図だ。

相手は地面に魔法陣を素早く描く。流星は成績優秀者。

地面から沢山のゴレムが現れる。

土系統の魔導師らしい。

「…………さて、行くか」

俺は双銃を見つめる。

今、俺の双銃は、先生の魔法で、ゴム弾みたいなものしか出ないようになっている。

模擬戦用だ。

神経を集中する。

数は……多い。

でも、苦戦する数じゃない。

銃口をゴーレムに向ける。

トリガーを引く。

実弾より威力は劣るが、ゴーレムは倒せる。

魔法も纏えるようだ。

魔法をゴム弾に纏わせ、放つ。

黒い閃光が次々とゴーレムを砕く。

後ろに気配が。

避ける。

トリガーを引く。

今は、戦場全体に神経が張り詰めている様な感じだ。死角に入られ

ても、すぐにわかる。

銃口を後ろに向ける。

放つ。

絶好調。

「……………」

油断した。

ゴーレムの攻撃が当たる。

それほど痛くない。

この制服は軽い。

しかも丈夫だ。

「……………」よし」

俺は、相手の攻撃が当たらない程度の距離を保ちながら、敵を倒していく。

ゴーレムは全て消え、残るは金髪ナルシだけになった。
まだ魔法陣を描く。

次は剣だ。

いいだろう。相手してやる。

俺は素早く接近戦に持ち込んだ。

剣と剣のぶつかり合い。

金属と金属が当たる音が響く。

流石、自称成績優秀者。剣の扱いは長けているらしい。
でも、

俺の方が一步上手。

相手の攻撃を右の銃で受けながら、左の銃で相手の足を撃つ。
足から崩れ落ちる。

すかさず銃口を向ける。

トリガーに指をかける。

「ま、参った!!」

相手は手を挙げ、大きく叫ぶ。

トリガーから指を離す。

ちなみに、最後のやつ、撃つ気はさらさらなかった。脅しというやつだ。

「……………」

身体が軽い。

気分は最高。

絶好調。

相手はまだ座り込んでいる。

俺は彼に手を伸ばす。

「強かった。流石だ」

彼は驚いた様子でこちらを見る。

少ししてから、俺の手を掴み、立ち上がった。

「ありがとう」

「どう致しまして」

俺は振り向き歩きだす。

「どうして？」

「……………」

彼は俺に尋ねてきた。

「君はあれだけ休んでたのに、どうしてそこまで強い！？」

「……………さあな」

俺はそう答える。自分でもわからないからだ。

「君、あの時と少し変わったか？」

彼はそう言った。

少し間を開けてから、俺はこう繋げる。

「……………強いて変わったとすれば……………」

“覚悟”……………かな」

「……………覚悟……………」

「そう、死なない覚悟。そんだけだ」

俺はそう答えてすぐに部屋に戻ろうとした。

彼には解らなかったようだった。

そんなこと、簡単だ。

ただ死なないように気をつければいい。

相手の攻撃に当たらないようにするだけだ。

そのために、出来ることは全てやる。

神経を張り巡らすのもそのうちの一つ。

他の奴らにはわからないのかもしれない。

この世界は、死んでも、名誉になる。

死んだら、

そこで、

終わりなのに。

11話 魔技試験ト男ノ娘？

魔技試験当日。

いつも通りに教室に入ると、室内の空気が痛く感じた。皆緊張していて、面持ちが険しかった。

アリアも教室にいたが、彼女も緊張しているようだ。声は掛けないでおこう。

俺は、双銃の点検をする。

双銃をよく見ると、ボディに文字が描かれていた。しかも各銃に別々の文字があつた。

「……………」

文字の刻まれた銃も、悪くない。

そして再び、銃の点検に戻る。

錆もないし、剣の刃こぼれもない。ほぼ完璧だ。教室の扉が開き、先生が入って来た。

「それでは、これから魔法技術検査試験を始める。全員、外へ出る」
そう言われたので、俺達は列を作り、外へ出た。

「それじゃ、先頭の奴から来い」

うちのクラスの奴が前に歩きだす。

俺はそれをじつと見る。

一体、どんな試験方法なんだろう？

うちの先頭の奴は、ある方向に向けて、雷の魔法を放つ。彼は雷魔導師らしい。

「……………次」

次の奴が前に出る。

あれで終了？

簡単じゃん。

でもまだ、最初の奴の顔は険しい。

「あれで終わりじゃないのか？」

俺はアリアに小さく尋ねる。

「……………」

「無視かよ」

「集中してるの」

「次……アリアさん」

「呼ばれたぞ？」

「わかつているわよ」

アリアは前に出る。

よく見ると、先生から少し説明を受けている。

説明があるなら問題無いか。

アリアの試験が開始した。

「おー、スゲー」

アリアは炎も氷も雷も扱える、しかも防衛魔法の使える、いわゆる
万能魔導師らしい。

「次……桁人」

お！名前を呼ばれたぞ？

俺は前に出る。

「お前の試験は……魔法でこの敵を素早く倒せ。武器は使うなよ」

武器は無しか。ちょっと不安だな。

でも、やってみよう。

神経を集中。周りに張り巡らす。

「それでは……試験開始」

目の前に、いかにも頑丈そうな鉄の鎧を付けたゴーレムが現れた。

「……………」

皆はこれを見て、どう思ってるだろう。

無理そう？

簡単そう？

俺は、

簡単そうだ。

足元に魔法陣は描かない。

それは必要無い。

「……………」

なんか、制服に魔力が貯まっているような気がする。
手を前に伸ばす。

ゴーレムの足に影を絡ます。

そのまま影でゴーレムを被う。

身動きは出来まい。

「……………ん？」

目の錯覚かもしれない。

制服の一部が揺らめいている様に見えた。

お！

いきなり閃いた。

俺は手に魔力を集中させる。

影は次第に剣の形になっていく。

闇の剣……完成だ。

俺はゴーレムに向けて、剣を一降し振るう。

意外と切れ味がいい。

影に被われたゴーレムは、真つ二つに割れ、そして消滅した。

この力は、双銃の使えない時に便利だな、とか思った。

意外とあっさり、俺の試験は終わった。

つまんない。

暇だから、他のクラスの何人かの試験を見てみようか。

俺らの隣で別のクラスが試験をやっていた。

次の奴は青い髪の男子だった。後ろで髪をくくってる。

男のくせに髪長いな。鬱陶しくないのかな？

俺も人の事言えないかな。

しかも中性的な顔立ちだから、一歩間違えれば女と思われないか？
世界は広いな。

どうでもいいけど。

「……………はっ！」

あいつも俺と同じように、魔法の力で剣を作り出した。
炎の剣だ。

あいつは炎魔導師なのか。

しかもキレのある剣捌き。剣の腕もたつようだ。
後のやつを見ていてもつまらなかったのも、俺は別の場所に移動した。

いい感じの木陰を見つけた。

そのまま俺は寝転んだ。

そよ風が気持ちいい。

「……………誰かいるの？」

誰かが尋ねる。高い声。女子か？

顔を上げると、そこにはさつき試験を受けてた青髪の男がいた。

その容姿でその声かよ！

……………ややこしい。

そいつは俺を見つめながらまた尋ねる。

「……………何してるの？」

「……………見てわかんない？」

「昼寝？」

「まだ寝てない」

「じゃあ何？」

「……暇潰し」

「隣いい？」

「……勝手にどうぞ」

そいつは俺の隣に座った。

俺は寝転んだままだ。

「君の試験見てたよ。……凄かった。強いね、君」

「……お世辞のつもり？」

「ありのままでよ。あのゴーレムを簡単に倒すなんてさ」

「お前も倒しただろ？」

「そうだけど……僕は時間がかかったから」

「それに、お前も魔法で剣を作ったし」

「あれはたまたまだよ。なんかいきなり閃いて、やってみたら出来たって感じ」

「俺もそんな感じ」

「君も？」

そいつは驚いたようにこっちを見つめる。少しずつ顔が近づく。あれ？なんか肩に付いている。

虫か？

「なあ、肩に虫付いてんぞ？」

「ひゃあ！！？む、虫！？」

そいつは悲鳴を上げながら俺に引っ付いてきた。顔が青くなっている。

「……………」

男に引っ付かれるのは正直嫌だが、仕方がないので我慢する。

「虫……取ってやろうか？」

そいつは何度も頷く。そこまで虫嫌いか？

仕方なく虫を取ってやった。

それでもそいつは俺から離れない。

舌打ちをする。

「俺、そういう趣味無いんだけど……お前ってそっち系？」

「違います!!」

全力で否定された。

「知ってるけど……」

「……………むうっ!」

頬を膨らますしぐさは、どう見ても女の子だ。こんな奴もいるんだな。

本当に世界は広い。

「桁人!」

「おゝ、アリアじゃん」

「……………」

「……………お隣りの方は誰なの?」

アリアは尋ねてくる。何か怒ってるっぽい。

「……………怒ってる?」

「別に……………怒ってなんかないからね!」

とか言いながら、俺の頭上には大きな氷の塊が!

「怒ってるじゃん!」

「だから怒ってないってば……………ほら!」

彼女はニツコリ微笑む。

俺にはその微笑みが逆に怖かった。

「あの……………一応私……………じゃなかった、僕は男ですよ?」

「……………え?」

アリアは驚いた様子で立ち尽くしている。

「よく間違われるんですけど……………ほら、服装も男子用だし」

「……………ったく、ちゃんと服装見るよ。しかも、俺が怒られる理由無いだろ!?!」

「……………ムカツ」

アリアは手を降ろす。

氷の塊が落ちてくる。

「あ!あのバカ!

「……お前は逃げる」

「いや……でも……」

「危ないから！俺の魔法の巻き添いになるかもしれない」

「………わかりました」

あいつが俺から離れた後、俺は双銃を取り出して、銃口を氷に向ける。

全く、めんどくさい。

「………碎ける」

銃口に魔力が最大に溜まった瞬間に、トリガーを引く。

無数の黒い光は、氷のある一点を狙い、一直線に集まる。

そして一本の弾道は、氷の中心部を貫き、粉々に砕いた。

その後俺は、その氷の破片に向けてトリガーを引く。とりあえず、俺らへのダメージは最小限にしておこう。

「………ふう」

「凄いです！」

「流石は術人」

「お前な……むやみに魔法で俺に攻撃すんな！殺す気か？」

「………ごめんなさい、殺す気だった」

俺は溜息をつく。やっぱりかよ。

「………くす」

「………笑うなよ」

「だって可笑しいんだもん」

「………そっぴやお前、名前は？」

「………へ？」

そいつは驚いている。何故か顔が赤い。何故？

「どど、どうして？」

「どうしてって………まだ名前聞いてないし、お前って言うのはなんか失礼じゃね？」

「あ、そうだね、わた………僕はハル」

「ハル………な。覚えた。」

俺は衿人……桐島衿人だ。

……そこでこの“赤髪ツインテールバカ”はアリアって言うんだ。覚えてやっていてくれ」

「何でそんな紹介なのよ！あと何よ！その“ツインテールバカ”って……！」

「ん？見たまんまだよ。悪いか？」

「あんたバカ？一回死ぬ？」

「一回も何も、死んだら終わりじゃん……！」

「煩い！！死ねえ！！！」

アリアの手の上には、超でかい炎の玉が浮かんてる。

「うわぁ……これはヤバいって……！」

俺は素早く逃げる。体は軽い。

「待ちなさい！！！」

こんな状況で、待てって言われて待つ奴いるかよ！

その状況を見てハルは、ただただ笑っていた。

腹抱えて笑っていた。

……助けてくれよ！？

12話 戦争ノ予兆

無事に試験も終わり、次の日には早くもクラス替えがあった。
俺とアリアは同じクラスだ。

あと、この間戦った金髪ナルシストも一緒だ。

「やあ衿人君にアリア君」

「ようナル造」

「名前が違う！！僕はレオンだ！」

「そうだっけ？」

俺はアリアに尋ねてみる。

「知らない」

「酷いじゃないか、アリア君」

そう言つて彼女は教室に入る。俺とレオンもそれに続く。

「……………あ」

教室に入ると見覚えのある奴がいた。

「やあ衿人君」

「ハル！お前も同じクラス？」

「みたいだね」

「やあ、君可愛いね」

俺とハルが話し合っている所に、レオンが割り込んできた。
手には赤いバラを持っている。

「そのバラ……………いつ持ってたんだよ？」

「僕はいつでも準備しているのだ！」

そっぴやレオンは、ハルが男だつて知らなかった。

「おいナル造、実はハルは……………」

「……………ほつときなさい」

アリアが止める。

「アリア？……………でも、あいつ知らないし……………ハルが男だつてさ」

「いつか気づくわよ。それに、あんたが言わなくても本人が言うわ

よ」

「ふうん」

その後大きな叫び声が聞こえた。レオンの声だ。ハルがこっちに寄って来る。

「どうしたわけ？」

「あの……僕は男だって事を伝えたらいきなり叫びだして……」

「……予想的中」

俺はアリアの方を向き呟く。

アリアはそれを無視して自分の席に向かう。

「……ふう」

溜息をついた後、俺も自分の席に向かう。

窓際の席だ。しかも前にはレオンがいる。

「なあ桁人、知ってるかい？」

「何が？」

「このクラスの担任、新しい人らしい。しかも女性だ」

「……知るか」

「僕の美しさに惚れなければいいんだが……」

「ハイハイ……」

とりあえず適当に相槌をうっておく。

別に先生が誰でも、俺には全然関係ない。

……そう思っていた。

ある時間になり、鐘が鳴る。俺の世界でいう、ホームルームの予鈴だ。

教卓側の扉から先生が入って来る。

「ハイハイ、皆席に付いてね」

「………美しい」

レオンが呟く。

先生は自己紹介を始める。

「はじめまして、今日から皆さんの担任になる“桐島悠子きりしま ゆうこです。よろしくね」

教室がざわめく。

「きゃー！先生、スツゴく美人」

「しかもスタイルもいい」

女子の歓声がさらに広がる。

……ちなみに、60人いる俺のクラスの男子は、俺、レオン、ハルの三人だけだ。どういったクラス分けだ？どうやったらこうなるんだろうか？

「大変だ桁人。今僕は、とてつもないハーレム状態の中にいる。感動だ！

……って、どうしたんだい桁人？何故かグツタリしているが……」

「あゝハイハイ、ハーレムね。良かったじゃん」

「……そういえば、君も“桐島”って名前付いていたね。彼女と何か関係あるのかい？」

ぐっ……こいつ。鋭い！

俺は机の上に伏せる。

「何でここにいるんだ？」

「何か言ったかい？」

「独り言……」

どうしてなのかわからない。

彼女……桐島悠子は、何を隠そう、俺の姉だ。

俺の姉だからこそ不思議だ。

何故彼女が“この世界”にいるのか？

姉が担任になって、初めての授業。

魔法化学の授業だ。

俺は窓の外の景色を見る。何を言ってるのか全くわからない。

「……いてっ」

頭に何かが飛んできた。

よく見るとそれはチョコレートだった。

「はいそこ！ボツとしない！」

「……ハイハイ」

また俺は窓の外を見る。

どうしてこっちに姉がいるんだろう？

もしかして、前に言っていた教師みたいな仕事ってこれの事？
いつからこの仕事をやってんの？

疑問が絶えない。

俺は机に伏せて眠る。

「悠子先生とあなたってどういう関係？」

休み時間。いきなりアリアが聞いてきた。

「別に……大した関係じゃねーよ」

「……じゃあ答えて？」

「……」

何故アリアはそんなに怒ってるわけ？何か後ろから怒りのオーラが見えるし、ゴゴゴゴって幻聴が聞こえるし！

「あいつ……俺の姉貴なんだよ」

「……そうなの？」

「そうですよ？」

『うわぁ！？』

俺とアリアの悲鳴が重なった。後ろからいきなり姉が現れたからだ。

「脅かすなよ……」

「勝手に驚いたんでしょ？」

「……否定はしないけど」

「素直で宜しい！」

「あの……」

「どうしたの？アリアさん」

「悠子先生は、私達に何か用ですか？」

「ご名答！」

姉貴はアリアに指差しながら言った。

「俺らに用って？」

「実際には君達四人だけだね……学園長が呼んでるよ」

「学園長が？」

廊下を歩いていると、前から学園長が歩いている。

「あの……何か用ですか？」

「何がだい？」

「は？こいつすつとぼける気か？」

「あの……先生が俺ら呼んだんじゃ……なあアリア」

「そういえば忘れてた。あんたが学校休んでる時に、先生は学園長を辞めたのよ」

「うっわ！衝撃のニュースじゃん。」

「てか、そんな大事なことを忘れんなよ！」

「まあまあ二人とも、急がないと。新しい学園長なら、部屋にいたよ」

「ありがとうございます。……ほらあんたも」

「……どうも」

俺らは新しい学園長の部屋に向かって歩きだした。

ふと思ったが、どうして先生は学園長を辞めたんだろう？

「……ここか？学園長の部屋って」

「多分……」

アリアは曖昧に答える。

「とりあえず入るぞ?」

アリアはコクリと頷く。

俺は扉の前に立つ。

ノック。

「……どうぞ」

返事が来る。

「失礼します」

アリアが言った。俺は言っていない。

「よく来たね、アリアさん。」

そして、はじめまして、桐島柊人君」

「……はあ」

「柊人君達、早いね」

後からハルとレオンが入って来る。

「……君らもよく来てくれた」

「……それで、俺らに何か用ですか?」

俺はいきなり質問する。

「唐突だね?そんなに早く知りたいの?」

「ああ……じゃないとスツキリしない」

「……わかった、話そう、君達を呼んだ理由を……ね」

学園長は手を重ね、真剣な表情を作った。

「我が軍の情報によると、敵国がこちらに攻めて来る計画をしているらしい」

「……らしい?」

「今はまだわからない……が、もしものために十分な戦力を保持しておく必要がある。」

……そこでだ、君達生徒の中から優秀な生徒を選び出して、これを学園の代表軍としたい」

わかるようなわからないような……まあ、だいたいわかる。

「我々が学園の代表ですか?」

レオンが学園長に尋ねる。

「そつだよ。これは凄く名誉な事だ」

「……凄い」

「凄いわけない」

小さく呟く。

「……何か言つた？」

アリアは俺に小さい声で尋ねる。

「なんでもない」

俺も小さい声で返事をする。

「それで明日から一週間程度、選抜生徒達で合宿をしたいと思ひます」

「明日！？いきなりですね？」

「出来ることは早めに……って言うじゃない？」

そうして俺達四人は、新しいクラスから、生徒代表の軍に入ることになった。

時間が経ち、次の日。

俺達は整列している列の後ろ側に並ぶ。

「結構人いるな」

「そつだね……しかもほとんど女子」

「……ふう」

俺は溜息をつく。レオンはそういうふうにしに感じないのかよ。

「ほとんど女子って言つても、男子も結構……」

俺は辺りを見回す。

ガツクリと肩を落とす。

「……いねえー！！男子少なー！！」

「まあまあ桁人、この一週間……楽しもうじゃないか！」

「……一人で楽しめ」

レオンはつれないとかほざくが、俺は無視する。

「……大丈夫？」

ハルが心配そうに声をかけてくれた。

「……ああ、心配しないで」

「それならいいけど……無理しないでね」

ハルはそう言う。俺は心配かけないように大丈夫だと伝えた。

アリアは何も声をかけない。いつもの事だけど。

「それでは出発しよう」

先頭に立つ先生が言った。

そして俺達は歩き始めた。

また戦争が始まるのか……

そう思うと気が重くなる。

左の肩辺りが痛く感じる。

……また俺は、人を殺すんだ……

俺は音楽プレーヤーを取り出す。

イヤホンをつけ、気休めに音楽を聴く。

始めに流れてきた曲はロック。

リズムカルな音が耳の奥に響く。

それでも、俺の気持ちを上げることは出来なかった。

13話 合宿！

何時間歩いたことか……

森を抜け、洞窟をくぐり抜けると、一つの町にたどり着いた。

先生が整列の合図を出す。

「えー、合宿において重要な話を話すから、よく聞いとけよ？特に桐島！」

「俺かよ……」

……たしかに、最近はボツとしてるけどさ。

「今回の合宿は、二人一組で行動してもらう。それぞれチームはこちらで決めてある」

先生はそれぞれのチームの名前を言っていく。

俺は誰と一緒に言うって、

「桁人君、僕と一緒にだね」

「らしいな……」

「そういえば、レオン君は？」

「ああ……あいつならどっか行った。何か叫んでたけど……どうでもいいや」

「ハハハ……ま、まあ、よろしくね」

「ああ……」

先生からまた指示がある。

「部屋は同じチームの奴と一緒にだ。それぞれ合宿所が違うから、よく確認しとけ」

「え？……皆で一緒の合宿所に泊まるんじゃないんですか？」

「ああ……今回の合宿は、各チームでの模擬戦だ。別れたチーム同士で戦いあう」

「いわゆるチーム戦ってやつですか？」

「簡単に言えばそうだ。これで、チームメイトの能力も知れるし、連帯感も生まれるはずだ」

「……曖昧」

俺はボソツと呟く。

「チーム戦は明日朝9時から。今日は解散」

先生がそう言った後、生徒達は、各チームに渡された紙を見ながら、合宿所へと向かっていく。

「……俺達も行こう」

「……うん」

俺達も、自分達の合宿所へと向かう。

俺達は無事に合宿所までたどり着いた。

部屋に入ってすぐ、俺はハルに尋ねた。

「そういえば、俺、疑問に思ったんだが、チーム戦って、この町の中で戦うのか？」

「多分そうなる……かな？」

ハルは曖昧に答える。多分ハルも分からないのだろう。

「そうしたら、この町の住人は危なくないか？」

「ああ、その事だったら、多分心配いらないよ。ここの町全部、僕らの学園の所有地らしいから」

「……マジ？」

「噂だけだね。それか、今日ぐらいに避難させるのかも」

「……チーム戦か……めんどいな」

「うん、建物の裏から奇襲が来たらめんどくさい。それにもし、この建物がばれたら、僕らの負けだしね」

いや……俺はそんな話をしたいわけじゃなくて……単純に、めんどくさいなって思っただけ。

でも、ハルにも悪いので、その事は言わないでおこう。

「……話変わっけど、風呂、どっちが先入る？」

「僕が先に入っればいいかな？」

「別に、俺はどっちでも」

「それじゃ……今から入るね」

そう言つてハルは、シャワールームに入つていった。

「……ふう」

俺は溜息をついた後、制服のポケットから音楽プレイヤーを取り出す。

暇潰しに音楽を聴くかな。

寝転んだまま音楽を聴いてるとだんだん眠くなってきた。

眠気に勝てず、そのまま瞳を閉じていった。

……そういえば、最近あの夢を見ていないな……

……彼女、元気にしてんのかな？……

……夢の中なのに元気かつてのは少しおかしいかな？

「……人君……桁人君……」

誰かが俺を呼んでる。

あいつかな？

「……起きて、桁人君……」

俺はゆっくり目を開ける。

「あ、やっと起きたね、桁人君」

「ハ……ル？」

いつもより髪が長い。あ、そうか、あいつ、髪結んでたっけ。こいつ、ぱつと見はやつぱり女子。

しかも近くににいるからか？胸も少し大きくなっている気が……
幻覚……だな。きっと。

「どうしたの？ボゥツとして」

「あ……いや、なんでもない。」

……そうか、俺、あのまま寝ちまったのか」

「そうみたいだね。次は桁人君がお風呂に入る番だよ」

「おう」

俺は音楽プレイヤーをベットの上に置く。

「ねえ術人君……それって何？」

ハルは音楽プレイヤーを指差しながら言った。

「……これ？」

そういえば、この世界には、音楽プレイヤーみたいな機械系統は存在しないんだっけか？

どんな感じに説明すればいいんだろう？

「……風呂からあがったら説明する」

そう伝えてから俺はシャワールームに向かう。

シャワーを浴びながら、左腕を見る。

左腕の黒い模様は、また増えていた。黒い線の下に何かのスペルが描かれていた。しかも全く読めない文字だ。

「……何だよ？……これ」

少し触れてみる。

すると、突然黒い線の部分が光り出す。

「うわ？……何だ！？何で光ってんの！！？」

光はだんだんと強くなっていく。目が開けられなくなる。

「うわあああああああ！！」

俺は大声をあげた。

「どうしたの！？術人君！？」

それに気付いたのだろう、ハルが駆け付けてきてくれた。

「あ……あれ？……何も起きてない？」

俺は入念に周りを見回す。特に変わった事は無いし、壊れた物も無い。

「…………あれ？」

左腕を見してみると、黒い線や謎のスペルが消えている。そして、いつの間にか黒い腕輪が着いていた。

「…………？」

どうしてかは分からない。とりあえず気にしないでおこう。

「…………どうした？ハル。顔を赤くして」

「え？…………いや、何でもないよ」

ハルはそう言いながら顔を俯かせる。何故？

俺は風呂から上がるうとした。ハルは勢いよくシャワールームから出て行った。

そういえばもう一つ不思議な事があった。

左胸の辺りに何か模様が描かれていた。

どういった模様かって言うと、

説明しづらいけど、強いて言うならば、ハート型…………かな？

日が変わり、先生が言っていた時間に外に出る。

いきなり耳元に先生の声が聞こえる。しかし誰もいない。これも魔法の一種らしい。

『これから合宿一日目を開始する。皆のもの、精一杯争いあってくれ』

「…………命令口調かよ」

『ちなみに、この合宿で好成績のチームには、特別賞がある。それを目指して頑張ってくれ』

ここで先生の声は消えた。

「特別賞って…………そんなんで頑張れねえよ…………なあ、ハル…………」

ハルに話を振ろうとしたが止めた。

なぜなら、こいつが凄くやる気になったからだ。

もしかして、他の奴らもこんな感じになってんじゃないか？

お前ら……単純か！？

もちろん声には出さない。心の叫びだ。

「行こう！術人君」

「お、おう、はしゃぎすぎんなよ？」

全然聞いてない。

とりあえずこんな感じで、合宿が始まった。

左腕には、黒い腕輪に日光が当たり、光っていた。俺は腕輪を見つめる。

じっくり見てみると、左腕に刻まれていたスペルと全く同じ文字が、腕輪にも描かれていた。

「……やっぱり読めない」

きつと、この文字にも意味があるんだろう。

今はそんな感じにしか思っていなかった。

14話 進化ト変化

合宿の一日目が始まり1時間が経つ。

俺とハルは、町を歩いていた。

ハルはどうか知らないけど、俺は周りに神経を張り巡らせながら歩いていた。

「……………」

「……!？」

俺はいきなりよろめく。ハルが支えてくれたから倒れはしなかった。

「大丈夫？無理してない？」

「ああ、多分大丈夫。無理はしてるけど」

「周りの敵だったら、僕も注意してる。そんなに気負わないでいいよ」

「……………」

ハルも周りに気を配らせていたみたいだ。正直、助かった。

「……………」

俺は何かに気づく。そして俺はハルに近づく。

「ひゃあっ!？……………」

「いいだろ？男同士だし」

「そ、そうだけど……………」

ハルは顔を赤らめている。

俺はハルの耳元にそっと呟く。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

俺達は後ろの気配を気にしながら歩き続ける。

俺はわざとよろめく。

その瞬間、隠れていた奴らが飛び出して来た。

「……かかったな」

俺は双銃を取り出し、相手に向けて撃つ。

相手はギリギリで回避したが、何発かは当たったと思う。

「……………」

俺達と相手は睨み合う。警戒し合ってどちらも動かない。

互いのポケットが光りだす。

俺はポケットから合宿所への地図を取り出す。

地図はどんどん光を増す。

地図は光に変わり俺達を包んだ。

「な、何だこれ？」

『言い忘れていたが、お前達に配った地図は合宿中は、戦闘になると自動的に防衛魔法になるようになっていいる。』

ちなみに、その防衛魔法には耐久力があって、それが0になったら強制的に合宿所に戻るようになっていいる。しかも、その日は合宿所から出られなくなるオマケ付き。

それじゃ、精一杯頑張ったまえ』

先生からの通信が切れた。

「説明長い……耐久力って……どこかに書いてるわけじゃあるまいし、わかんねえよ」

「ちゃんと書いてるよ？……ほら、手の平に」

ハルはそう言った。

手の平を見ると、たしかに数字が書いてある。

この合宿のルールを簡単に言えば、相手チームに攻撃しまくって、相手が突然消えたら勝ちって訳だ。

それが分かれば、後は簡単……

相手を潰せば良いのだ。

「行くよ！ 桁人君」

「……………ああ」

俺達は改めて戦闘に入る。

相手の武器は剣と弓だ。

剣を持った奴が、こっちに突っ込んで来る。

俺は手に魔力を溜める。

「……………ん？」

左腕の腕輪が黒く光りだす。

手に剣の形の影が現れる。そして剣が完成する。

剣と剣がぶつかり合う音がする。

多分、剣の腕は相手の方が上手だ。なんとか互角に持ち込んでいるのは、俺の剣の魔力が強いためた。

「……………っ！」

「……………くっ！」

相手は一度、俺から離れる。そしてまた怒濤の攻撃が来た。

俺は、集中して攻撃をかわす。

「……………ハア……………ハア」次に弓矢の攻撃が来る。

流石にあの猛攻を回避するのに結構な体力を使った。いきなりは動き出せない。

「……………チッ」

……………当たる！

そう思っていると、

「ファイアオール！」

の叫びとともに目の前に炎の壁が現れた。

「大丈夫？ 術人君」

「サンキュ……………てか、さっきのアレ何？ その……………技名？」

「え？……………あー、うん、恥ずかしいけど」

ハルは頬を赤らめながら言う。

そんなことを話している間にも相手はまた猛攻を仕掛けて来る。さっきはその猛攻に振り回されたけど、今度はそうはいかない。俺は剣を握りしめ、相手に向かっていく。

鍰ぜり合いになる。

俺は剣に魔力を注ぐ。これで、力は俺の方が少し上になる。俺はその勢いで相手との距離を作る。

相手は俺との競り合いに負け、よろめいた。この瞬間に俺は剣を戻し双銃に替えた。

そのまま連射。相手に当たる。

その攻撃を耐えきった相手は、勢いよくこちらに突っ込んで来る。

「……甘いよ」

俺はまだ、銃口を相手に向けたまま。

銃口に魔力を溜める。

相手の攻撃がギリギリ当たる所で、俺はトリガーを引く。

最大限に魔力が溜まってなくても、この距離で当たると結構ダメージを喰らうもんだ。

案の定、相手は倒れ込み、そのまま動けなくなった。

多分気絶しているんだろう。

「ハルは大丈夫か？」

俺はハルに話しかける。

「こっちは大丈夫だよ」

ハルの方も、敵を倒したようだ。

相手の二人は、いきなり光に包まれて消えた。

「……負けたら、こんな感じに帰らされるのか……」

しかも合宿所から一步も出られなくなる。

これはなんか、負けられないな、って思った。

それ以降は他のチームとは遭遇しなかったし、周りに他のチームがいるような気配もなかった。

とりあえず一日目は無事に終わった。

そして夜になる。

合宿所に着いたとき、ハルが唐突な意見を出した。

「ねえ桁人君、今から二人で模擬戦をしようよ」

「……は？」

いきなりの事に俺はそう答えるしか出来なかった。

「いきなり何言い出すんだよ？」

「僕ね……今日の戦いで何かを掴めそうだったんだ。だから、その感触を忘れないうちについて思って……」

……駄目……かな？」

「……………チッ」

舌打ち。

そんな物欲しそうな顔をされると、こっちは耐えれない。

「わかったよ。練習相手になってやる」

そうして俺達は、合宿所の近くの森で模擬戦をすることになった。

「……本気でいくよ」

「別にいいけど、怪我すんなよ？」

「大丈夫だよ。今日の分のライフはまだあるし……」

そういえば、今回の戦闘はあんましダメージ喰らわなかった。多分まだライフには余裕があるはずだ。

多分ハルは、そう考えてこの模擬戦を思いついたんだろう。全く、無駄に賢い奴め。

「それなら遠慮なく……」

俺は気を張り巡らす。目の前の“敵”に集中する。

「……………行くよ」

そう呟いて、俺は飛び出す。手には、闇の魔剣を持っている。横払いを仕掛ける。

「……………っ！」

ハルはとっさに炎の魔剣を取り出し、これを防ぐ。

流石。

俺は距離を置いて、武器を双銃に替える。

闇の魔剣は、魔力が強く、力勝負に長けているパワータイプ。それとは逆に双銃は、銃撃と銃口近くに着いている短剣での攻撃が切り替えれるテクニカルタイプ。

俺はこのタイプの違う二つの武器を切り替えながらハルに挑む。

双銃の短剣で少しずつ距離を縮め、ここぞって時に魔剣に替える。これにはハルは苦戦を強いられている。

「……やっぱり強いね、桁人君は……」

「ハルさ……俺の事、君付けじゃなくて、呼び捨てでいいから」俺はさりげなくそう言った。

「……それじゃ遠慮なく、行くよ、桁人」

ハルは両手に炎の魔剣を取り出す。そして、両手を合わす。手には大きな炎の鎌が出来ていた。

「やった！……完成だ。」

……これが僕の新しい武器……“プロミネンス”だ！」高らかと名前を命名するハル。

「良い名前じゃん」

「桁人も付ければ？その剣に名前」

ハルにそう言われた。

名前か……

ちよつと考えてみる。

すぐに決まった。

「……魔剣“グリモア”だ」

「決まったんだね？」

「おう」

「それじゃ、続き行くよ」

「……」

そしてまた戦闘が始まった。

ハルが、鎌を振りかぶる。

俺はとつさに避ける。

「かかった!!」

俺は後ろを見る。炎の大球が現れていた。

……しまった。

さっきの攻撃は囷。

本命は、こっちの攻撃だ。

「決まりだよ!」

「……………チッ」

俺は舌打ちをする。

「……………!」

急に身体中に魔力を感じた。

何かを掴めそうだ。

目を閉じる。

あるイメージが身体中に流れる。

ゆっくり目を開ける。

俺はニヤリと微笑む。

「笑つ……………た?」

次の瞬間、俺の身体から大量の魔力が飛び出す。

飛び出た魔力は宙に集まり、そして俺の身体を包む。

「な……………何これ?」

俺を包むモノが消えた。

「……………」

「衿人……………なの?

何か目の色が一段と紅くなってる」

「……………そうなのか?」

俺はただ冷静に尋ねる。

俺には自分の容姿の変化が分からない。

ただ、魔力が高くなった事と、身体中に魔力を纏っている事だけはわかった。

一段と身体が軽く感じる。

「……………」

ハルは魔法を使う。

炎の球が俺を襲う。

俺は手を広げる。

制服がまるでマントの様に広がり、魔法を防いだ。

「うそっ!？」

俺はハルが驚いているこの瞬間、ハルの懷に潜り込む。

双銃の短剣部分をハルに向ける。

「……………」

「ま……………まいったよ」

ハルは魔鎌をしまう。

「やっぱり強い。しかも、新しい魔法を覚えるなんて驚いたよ」

「……………たまたまだ」

これは本当の事だ。

「それじゃ今日の練習は終わり。お風呂に入るとするよ」

そして俺達は合宿所へと戻って行った。

合宿所に戻り、ハルが風呂に入っている。

俺はあの魔法の感触を思い出していた。

あの魔法は、敵の魔法を防ぐ事が出来る。

これを使い熟せれば、接近戦で怪我をする事は少なくなるはずだ。

「……………あ」

今更だが、ハルに音楽プレイヤーの説明するのを忘れてた。

一応話した方がいいのかな？

「……………後で聞いてみるか」

とりあえず今は歯磨きをしたいと思った。

シャワールーム前の廊下にある水道で歯を磨こうとした。

シャワールームの扉が開く。

「あ、ハル？こないだお前が聞こうとしてたことだけどさ……」
俺はそう言いながら頭を上げる。

「……………え？」

「……………！！？」

そこにいたのは、ハルと同じ髪色で、身体にタオルを巻いていた、ハルとは違う奴だった。

そして決定的だったのが、そいつが胸が大きかった事。それだけで、絶対そうだと思った。

そう……………こいつは、

「……………女の子？」

驚いた事に、ここにはいるはずの無い“女子”だったのだ。

15話 秘メ事 隠シ事

俺達の合宿所に女子がいた。

しかも図々しいことに、勝手にシャワーを使ってやがる！

……いやいや、問題はそこじゃない。

とりあえず俺は双銃を取り出し、銃口を彼女に向ける。

何故かって？

こいつが“敵”で、俺達がない間に合宿所に忍び込んだかもしれないからだ。

「……どうしてここに？」

俺は彼女に尋ねる。

彼女は口を開かない。顔が赤いまま突っ立っている。

「……ふう」

彼女には戦う意思は無いようだった。

敵であろうと風邪を引かれては困るので、とりあえずシャワールームから出した。

ベツトの上に座らせる。

俺は自分の制服を彼女に渡す。

「ほら……風邪引くぞ？」

しかし彼女は制服を羽織ろうとしない。

いきなり彼女が歩き出したかと思うと、ハルの荷物の中から衣服類を取り出し始めた。

「お、おい！……それ、俺のじゃないから……」

「……わかってるよ」

いきなり彼女が答えた。

彼女は俺の方を向いた。

その表情は真剣で、何か覚悟を決めたような目をしていた。

「……信じられないかもしれないけど、ちゃんと聞いてね……術人」

「……何で俺の名前を……？」

少し間が開く。そして彼女は喋り始めた。

「僕は……ううん、私は……ハル。君と一緒にチームのハルだよ。

私は……女なんだ」

「……………え？」

これは衝撃の告白だ。

実は、敵だと思っていた“彼女”は、ハルだったのだ。

「隠しててゴメン。……でも、仕方なかったんだ」

彼女……ハルは俯きながら話す。俺はただ黙って聞く。

「私の家系では、男の子があまり生まれなかったんだ。女では、あまり高い地位には成れなかったの。」

……この国では、男の子の方が高い位に成りやすかったから。魔力も体力も男の子の方が優れているし。

私の家族で魔法を使えたのは私だけ……私が家族を養っていかなくちゃいけないのに、私は女として生まれてしまった。

だから、私は女であることを捨てて、男として生きることにした。高い地位を手に入れて、家族を養う為にね……」

ハルの話は淡々と続く。

俺はただ冷静に聞いていた。

「……こんな話、君は信じるかい？こんな嘘っぽい話を……」
ハルは俺にそう尋ねる。

「……別に、信じなくてもない」

「……曖昧だね」

「俺はそういう奴だろ？」

「フフ……そうだったね」

ハルは少し微笑む。

「ただ……さ、だからって本当の自分を捨てることないだろ？」

「でも、女のままじゃあ、家族を養えない……」

「お前……おかしいよ。いや、この世界の奴らは、皆おかしい」

俺は小さく呟く。そして俺は、ハルに向かってこう言った。

「……それじゃ、今度は俺の秘密を言う。お前だけ言うのは、何か

フェアじゃない」

「べ、別に……話さなくても……」

俺はハルの言葉を遮って話しはじめる。

「お前は信じないかもしれないし、別に信じなくてもいい。実は俺、別世界の人間なんだ」

そう言くと、いきなりハルは笑い始めた。

「笑うなって……」

「だって、別世界とかありえないし!」

「俺だってそう思ってた。それが当たり前だっと思ってた……でも俺は、ここにいます。」

ありえないと思っていた、この…別世界に……

そう言おうとしたが止めた。

ハルのあの反応を見て、何を言っても信じてもらえないなって思ったから。

でも、ちよつとスッキリした。

やっぱり、言いたいことを溜め込むのはストレスが溜まる。

「ありがとうハル……」

「何で感謝したの？別にさっきの話、信じてないけど」

「話を聞いてくれたから。言っただろ？別に信じなくてもいいって……」

……

俺はそう言った後、少ししてから俺の想いを言った。

「別に、お前が女だろうと男だろうと関係ない。俺にとってお前はハルって“存在”なんだ。性別が違うからって、そう容易く変わる様なモンじゃないだろ？」

俺は言い終わった後、少し余韻に浸る。

良いこと言っただけ……俺。

マジ、自分に感動。

カッコイイぜ……俺。

その姿を見て、ハルは笑い始めた。

「だから笑うなって……ここは一応、感動の場面なんだから」

「フフ……ゴメンゴメン」

まあ別に笑ってくれるだけまだ良い。ドン引きされるのは勘弁だ
けど……

「ありがとう……… 祐人。」

「……… 何か惚れちゃったかも」

「……… 何て？」

最後にボソツと何か言ったが、俺には聞こえなかった。

「何でもないよ。また明日から頑張る！」

「……… おう」

そして俺達は眠りについた。

朝日と共に、俺は目が覚めた。何か絶好調？

手の平を見てみると、昨日減っていた数字が元に戻ってる。

ハルはまだ寝てる。

気晴らしに外を散歩しようと思った。

そして俺は扉を開き、一人外に出掛けた。

建物の屋根から差し込む朝日が目に当たる。

「……… 眩しっ」

実際、昨夜いろいろあったおかげで、全く眠れなかったはずだ。寝

たとしてもほんの2時間程度。

なのにこの調子。

寝不足なはずなのに、身体が軽い。今までより機敏に動ける気がする。

「……… やっぱり、俺の魔法が少し成長したからなのか？」

成長……… というよりは進化って言った方がしっくり来るかもしれない

い。

「……………!？」

何か人の気配を感じた。

この町には今、俺達、学園の関係者しかいないはずだ。しかも先生はこんな早くから起きなくても良いはずだ。

俺は、多分敵だと思い、警戒する。

気を張ってみる。一人のようだ。

建物の陰から出て来る。

「……………あ」

「やあ……………衿人君。君も早いね」

陰から出て来た人物は生徒ではなく、まさかの元学園長だった。

「学園長はどうしてこんな早くから?……………って、そういえばもう学園長じゃなかったんですっけ?」

「そうなるね……………ちなみに名前はマクスウェル……………だ」

「マクスウェル……………か」

「皆“マクセル”って呼んでるね」

「てか、マクセル先生もついて来てたんですね」

「私はやっぱり、上からただ見ているより、自分から生徒に教えたいんだろうね」

「積極的……………なんですね」

「というよりは好戦的……………かな?」

しかし僕は、そういう性分だからね、仕方がない」

へえ、と俺は思う。どちらかと言えば、落ち着いていて、あまり戦闘は好まないのかと思っていた。

人は見かけによらず……………ってやつかな?

「実際僕は、来るかもしれない敵国の襲撃を、ただ見ているのは嫌だった。だから、学園長という名の地位を他人に明け渡したんだ」

「……………」

俺はただ黙っている。何も返せない。

「……先生の魔法って何なんですか？」

俺は唐突に聞いた。先生は少し驚いていたが、すぐに微笑み答えてくれた。

「君と同じ、闇の魔法だよ」

「えー？」

俺は驚いた。まさか先生も闇の魔法を使えたなんて。

「でも、学園内ではあまり使っていない」

「どうしてです？」

「……知らないのか？」

そう先生は尋ねてくる。

「……はい」

俺は素直に答えた。別に、ごまかす理由がないから。

「……この国では、光の魔法は聖なる魔法として扱われている。逆に闇の魔法は邪悪なる魔法として恐れられているんだ」

「……そうなんだ」

初めて知ったよ。

先生は話を続ける。

「そして、闇の魔法を使う者を、我々は“魔女”と呼んでいた」

「……魔女」

夢の中の少女も、自分を“魔女”って言っていたが、そういう事だったのか。納得。

「……って事は、俺が魔女？男なのに？」

という疑問がいきなり浮かび上がる。それを先生は笑いながら答える。

「今では魔女って呼ばずに、黒魔導師って呼んでるけどね。でも、今だ魔女って呼んでいて、それを戦争に用いようとしている国もある。まるで、戦争の道具みたいな扱いで……ね」

「……道具……か」

俺は舌打ちをする。

人間を、ただ闇の魔法が使えるからって、戦争の道具にするのは、やっぱり……

「……………おかしいよ」

「そう、おかしい。この戦争自体がおかしい。

……きつと皆、わかっているはずなんだ……」

先生は言った。

先生の顔は、少し哀しそうだった。

「……………君は合宿所に帰った方がいい。もうすぐ戦闘が始まる時間だ」

「……………わかりました」

俺はただそう答えて帰っていった。

俺はハルと合流し、合宿所を出た。

「……………」

俺は気を張り巡らせる。

とりあえず近くに敵はいない。

「……………敵、見つかった？」

ハルが尋ねてくる。

俺は「今はいない」と答える。

「……………！」

張り巡らせた気に、誰かを感じた。

女。しかも、二人組。うちの制服。

間違いない。

敵だ。

「ハル……………右の建物の陰」

「……………OK」

そう言うとハルは、地面に小さく魔法陣を描く。

魔法陣から発生した炎は、まるで地を這う蛇の様に静かに、しかし

確実に敵の元に近づく。

俺はそれを気で確かめる。

「……………今だ」

「……………バーン！」

ハルがそう叫ぶとその炎は、彼女達の足元で爆発した。

彼女達の悲鳴が聞こえた。

あれは、戦闘開始の合図。

或は、俺達からの宣戦布告。

“やられる前にやれ”

誰が言ったか忘れたけど、その通りだと、今更ながら思う。

俺達は戦闘準備をすでに完了している。

「……………来ても良いよ」

心の中でそう呟きながら、相手が出て来るのを待つ。

そして、そいつらはやっと、建物の陰から身を出してきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1081x/>

DEVILS NAME

2011年12月19日21時37分発行